らせつゝあり。車の上にて「山の藝子」といふが、米山らしきを彈き、歌ふ。

◉此宵は、山の町を傾けて、男も女も皆、祝の行列に集まりぬ。山車こそ、中にも人氣を集めたるものなる可けれ。戀せじと、四社の明神に御祓して誓ひしを、今は受け王はずなりしなる可し。戀の山となる可くも見ゆ。

◉郵便局、書肆、警察署その外さま〳〵の店を見て、緣起、繪葉書など求む。是ほどの靈場なるに、今に至つて、簡便なる案内記の良書が一冊も無きといふは惜む可き事なり。

◉此の夕は遠く行かず、上の段町に迂廻して見る。上の段といへるは、事實に上段の町なればなるべし。高野山の遊所なり、料理屋、飲食店など軒を並べたる小さき廓なり。直言すれば、昔の神谷を、今、高野山の中に引き入れたるが、此の上の段なるべし。

◉山車に見たる女は、皆此の町より出づ。今宵は、此の町は蜂の群がり出でし

跡の蜂巣見る如くに、巣ばかり儼めしく殘り、寂として小さやかなる、羽音をも聞かず。此の町の後は、峰續きに翠樹茂り合ひて、月下の靄の美しき事限無し。此の町を南に經過すれば、林、開けて、月光、高く輝きて、金剛峰寺前の廣場なり。向ふに常喜院見ゆ。

◉女人禁制の昔には、町といふ可きもの全く無し。僅に珠數屋ありしのみ。維新後、僅に七八軒を增したるのみ。それとても總て男世帶なりき。女人禁制の信仰は尙山中には行はれたり。

◉此の夜、雛僧來り、吾輩の爲に、隣室に炬燵を造り、堆かく蒲團を掛けて寢しむ。寢るには尙早けれども、炬燵に臥して高野山案内記を讀む。吾輩、一昨年、信越の曾遊以來、久しく炬燵を知らず、炬燵に仰臥して雜書を樂讀するは吾輩の爲に珍味ならずんばあらず。

◉夜着の襟、餘りに厚くして電燈を遮り易く、被中に讀書するに便ならず、且

つ吾輩、臥讀の長きに堪へず、僅に一冊子を畢へて、陶然として安眠に落つ。客稀に、山靜かに、斯の秋、ひとり吾身の秋となる。

◉吾輩、冊子を擲ち、電燈を滅すれば、月光、障子に透り、寒天の空明を想はしむ。雛僧、炬燧を造りたるも、戸を閉さず。空には月光、ます〳〵冴え行くらし、筧の水音、澄みて響く。

其十一

朝の高野山。朝餐。趣味の索道。

◉早曉、讀經の聲に目覺む。炬燧の火力衰へず、被中の氣、暖かきこと蒸すが如し。被を排して起たんとすれば、朝寒水の如く、吾が領襟に流れ入り、窓外に筧の音、聞ゆ。

◉吾輩、速に顏を洗ひ、湯を呑み、忠魂殿に馳せて讀經の坐に侍す。先着の客、男女既に七八人あり。殿内、薄闇く、護摩の烟ゆら〳〵と立ちこめて、金佛ばかり光る。一座、各〻、供養するところあるらし。吾輩も亦先祖代々及び先考の供養を請ふ。

◉祈禱、供養を賴むの參詣人は地方の客に多く、三都に少しといへり、都人は、すべて信仰を冷笑するの癖無きに非ず。田舍人の淳樸にして、都人士の惡ずれたる也。然れども大檀主も亦都人士の中に出づ。此の院の檀主は、故松本重太郎。而して忠魂殿の扁額に揮毫する者は侯松方。彼は高野山の信者なるや否やを知らず。大師流の筆道に造詣するを以て名あり。

◉維新以來元老諸公、概ね能書なり。假令、能書ならずとするも太甚しき惡筆といふは見えず。公桂は惡筆にして、侯大隈は無筆なり、ともに信仰少き人と見ゆ。公伊藤、公山縣の如きは壯年よりして早く能書なりき。古稀を過ぎて能書の域に入れるは、唯だ侯松方の一人のみなるべし。

◉大師を學んで、能く大師の壘を摩するを得る者は未だ無し。然れども侯松方

の如き、筆意渾厚、法則、よく大師流の正系を蹤み、大師の颯爽たるを企及するを得ずと雖、筆致氣力あり、才を以て筆を驅る者の追及するところに非ず。彼は今、八十を過ぎて入木道に執心し、尙進境を認む。

◉古來、六十の手習を以て年寄の鉢卷に比して笑ふ。年寄の鉢卷は何程の効果あるやを知らず。侯松方が動もすれば首相たらんとするの心あるは危かるべし。但だ世人、侯松方に見て、また六十の手習の一語を笑ふことを得ず。蓋し、大師の遺德の一端なりとせずんばあらず。

◉讀經畢り、吾が室に歸り來れば、朝光、軒に滿つ。朝餐の時、和尙、來り話す。和尙は山中の奇僧を以て目せらる。必ずしも清奇といふに非ず、奇節といふに非ず。十人並ならざる事を考へ、爲す人にして、索道の籠に乘つて、中天に浮んで山を上下するは斯人のみなりと傳ふれども、其の眞僞を知らず。

◉索道に搭じて上下する時、不動阪の峻阪言ふに足らず。蓋し和尙は尾上勝藏

と共に索道を發起したる一人也。其の動機は、高野口、橋本等より山上に、馬背に齎らし來る米一石の運賃一圓二十錢に當る。一山を通計すれば、空しく運賃に費す總額、蓋し莫大の數に上るべし。此の金と此の勞とを省かんが爲に索道は設計せられたるもの。軌範を足尾銅山に取りしといふ。

◉索道の設計は妥當の計畫たるを失はず。唯だ創立後。當事者、其の人を得ざる爲か、或は機運の未だ熟せざるに依る乎。今日に至つて尙ほ其の利潤を收むるに至らず。且つ今の索道は、貨物の運搬に留まり、未だ交通機關とはせられず。

◉索道は交通機關として些の危險を伴はず。純然たる大規模のケーブル、カーたるのみ。悠々として、高空より高野山翠を鳥瞰しつゝ、遙に金剛山上の鷲鳥と、雄飛を競ひつゝ、暫らく飛行仙を氣取るを得るは、豈、快心事に非ずとせんや。

◉山上に於ける索道の起點驛より終點驛の椎出町に至るの間、空中飛行、僅に一時半を要するのみ。或は、椎出より索道に便乘して登山し、飛行機に依つて無事登山したる事を、自宅に打電して家庭を驚かしゝ參詣人もありしと聞く。

◉和尙は頻りに趣味の索道を語る。而して吾輩にも便乘せん事を勸む。吾輩、飛行機を好み、ケーブル、カーを好み、飛行仙たらんことは吾輩の趣味に合へり。然れども索道には時々停電ありと聞く。此の事最も恐る可し。

◉索道に停電ありたればとて、毫も顚落の危惧あるに非ず。唯だ籠のみ茫然として中天に停滯し、或は罪業の滅せざる亡者の如くに、長く宙宇に迷はん事、唯一の懸念にして、又た實に起り易き場合なりといふ。

◉索道の停電は、短きは二三十分、長ければ二三時より半日に近し。これほどの長き時間を、空しく萬仞の絶壑を瞰下しつゝ、高空に滯坐せば、其の無聊、果して如何ぞや。假令、狗賓に浚はるゝの恐れ無しとするも、頭は日に焦げ、

飢渴は大空の如くに、孤身に迫り來らん。

◉急がざる旅行者は、索道に便乘するを妨げず、然れども日程を急ぐ者、氣の弱き者は乘る可らず。既に籠の鳥となりし後は、後悔して、高空に、臍を嚙むとも及ばじ。而して萬一、便乘する者は、二三卷の面白き冊子と、飲料と糧食とを貯へて、停電に備へんことを要す。

◉趣味の索道は、吾輩、これを冥想するを得る。昔の世に索道あらしめば久米仙人は必らず乘りしならん。山中、茶店、往々、垢脫けし女あり。高天より其の白脛を睨視すとも、顚落して浮名を流すの憂は無かりしなり。

其十二

高野山に於ける松本重太郎。七堂伽藍。不動堂。

◉常喜院の和尙は大乘大圓といふ。姓も名も、ともに僧に理想的の名なり。宿坊の中に大乘院といふも、大圓院といふも有り。此の和尙は、姓名判斷の趣味

より見れば、一人にして三坊を兼ねたるものなり。

◉和尚は珠數を爪繰りつゝ語る。見ゆる割合には若しといへど、總入齒にして頬落ち、頽然たる老僧なり。和尚は又た頻に松本重太郎を語る。

◉松本は、吾輩、遂に見たる事無かりし。然れども彼が財界の一俊豪たりしは世上に著聞す。大阪築港問題の賑ひし頃、彼代議士たり。其の時、或夏、登山したりしを、彼が高野山に於ける結緣の始とす。

◉當時、彼、腦を病みしが、高野山に登れば、氣分精爽なるを覺ゆといひ、始めて高野山に憧憬するの念を起せり。爾來、彼、屢、登山に隨ひ、ます〳〵山氣の清明なるを味ひ、信仰より慰安に移り、遂に、其の骨を、此の山に埋むるに至るといふ。

◉山氣の清明なるは、吾輩も亦た痛切に、これを感覺するを得る。吾輩、京阪に悠游すること旬餘、難事多忙として筆硯に親まず。一たび登山するに及んで、

文思動いて已まず。此の山氣の中に淹留して、閑に、筆硏に耽るを得ば、如何に愉快なる可きやを思ふ。

◉吾輩の如き、つねに山水に放浪する者と雖も。高野の山氣に打たるゝこと此の如し。算盤と簿記帳との間に沒頭する者、一たび此に來らば、氣分爽朗、恰も放免されたる自由の身心を自覺せずんばはあらざるべし。

◉都町の空氣は、煤烟を以て濃密に、都市の人は、譬へば壓搾されたる空氣に棲むが如く、又た或は濁水に泳ぐ鮎の如くなり。都市の一夜、高き涼臺に登るも限り無き爽涼を感ず。

◉涼臺は爽涼といふとも、綠樹の氣無し。松本が大阪より高野山に登れるは、蒼綠の山氣を凝らせる涼臺に登れるの感を爲さずんばあらざりしなるべし。

◉和尚は吾輩を導きて、忠魂殿の後の位牌堂に到る。此の堂は、松本が山中の經藏を購ひ得て、寄附したるもの、正面に、彼の位牌を安置す。萬松院本覺雙

軒大居士といふ。

◉和尚は、更に、吾輩に、別莊の一游を勸む。別莊といふは大聖院なり。これ亦た松本の喜捨に係る。近年、庭苑を修め、崖に倚つて小瀑布を懸け、紅楓、蒼槙、門に滿ち、秋晩、爛漫の氣象、游賞するに餘あり。和尚、茗を煮、總入齒をモグ〳〵させつゝ、大師の偉德を讃美す。

◉吾輩は閑雅なる大聖院の畫景を辭して、高野山巡拜を爲す可く、先づ七堂伽藍に向ふ。快和の天氣、紅葉、青葉を眺めつゝ行く。烟草の烟、緩くひろがりて、直ぐに上に騰る。誠に巡拜日和なるべし。

◉七堂伽藍の名。何ぞ崇大なる。此の一事ありて、早く既に、高野山の規模如何を想像するに足れり。七堂伽藍といふは壇場なり。參詣人の間には、專ら七堂伽藍を以て通稱せらる。

◉吾輩、七堂伽藍の石磴を登り行く時、眞言宗大學生の七八人が、樂隊を組織

し、此の日、興行す可き學生角力の廣告をなしつゝ巡行するに逢へり。

◉壇上は、今、悉く舊時の建造物を保全するには非ず、或は烏有に歸し、未だ再建に及ばず、僅に礎石を存するのみなるもあり。一見、壇場、全局の規模宏大にして、參天の喬木、森然として場を環り、銀杏樹の金葉、紅楓葉など、其の間に點綴す。

◉此の宏壯なる大舞臺の中に、金堂の大建築、巍々、蕩々として聳え、麗らかなる初冬の軟日、一杯に、照り輝き、氣分高朗、人をして杖を停めて、坐ろに大師の遺德を讃嘆せしむるに足らずんばあらず。蓋し山內諸景、尤も宏壯雄偉なるものは、七堂伽藍を以て、檜舞臺となす可きなり。

◉高野山の中には、特別保護建造物と國寶とは到處に充塡せり、必ずしも一々列擧するを要せず。山內にて最も舊き建造物は、不動堂、壇場に於ける一異彩、また固より特保建造物に屬す。表行六間、裏行は半間短し。不動明王を本

尊とするが故に不動堂といふ。運慶の作なり。

◉不動堂は建久九年の建立にして、元一心院谷に在りしを、明治四十年、特別建造物に編入せらるゝと共に、此の地に移せるなり。案内者は此の堂の構造、四隅異樣なるを指示し、名工四人、隨意に造りて相合せしなりと言ふ。

◉堂の構造、四隅異樣なるは珍らし、當時に在つて、固より新機軸たりしを疑はず。四名工の合作といふも一理無きに非れども、或は一名工の新意匠を示せるものとも解釋すべし。抑も大師の靈場に、運慶の名作を安置するの不動堂、一箇、新機軸の、人を驚かすもの無くんばある可らず。

◉大會堂は七間半四面の堂、孫鳥羽法皇御追福の爲め建立、昔は毎年五月十一日より五十日間、宗義釋論の大談義あり、檢校學頭、學衆數百人、來會せし處なり。

◉二層樓、銅瓦葺の大塔は、未だ完成するに至らず。十六間四面、高十六丈、

本尊は五佛金色の坐像、各高七尺。但中尊の大日如來は八尺五寸。此の塔は象徵として見るべし、十六丈は十六菩薩を標し、柱樞四十九は摩尼殿四十九院に擬し、而して南天鐵塔に模して、密嚴の根本義を示すものといふ。

◉大塔は嵯峨天皇の建立に係り、正曆五年、雷火に燒かれ、院宣を賜ひて再建の時、平忠盛、監司たり。工事中に、忠盛卒して子清盛、其の事を繼承し、保元元年落成す。此の時、清盛、自ら頭血を刺し、大曼陀羅の中尊を彩色す。血曼陀羅といふは是なり。

其十三

對面櫻・高野山と清盛。秀吉。大隈。大塔。金堂。御影堂。

◉平相國清盛は高野山に於ても、一大立者たるを失はず。彼は兵庫築港に人柱を用ひたるは古今に著聞す。彼は人柱を用ふる前、早く既に、高野山に、自ら血曼陀羅を納めたり。彼は、大業は血を以て成る事を諒解せるものならずんば

あらず。

◉不動堂の前に、對面櫻あり。大師の御影、空中に出現し玉ひ、清盛の驕慢を戒めし處、故に對面櫻といふと傳ふ。清盛、登山の時、未だ全盛の暴威を揮ふに至らず。傳說、誤聞あらん。

◉大師、若し御影を現はし玉ひしとせば、寧ろ清盛の前途を戒飭せしか。或は血曼陀羅を嘉納し玉ひしなるべし。抑も血曼陀羅を納むるほどの清盛なれば、其の崇敬、熱誠は推察するに餘ある可く、或は、彼が信仰の餘、髣髴として、大師の幻影を空中に仰ぎ見しやも知れず。

◉秀吉も、文祿年中に登山せし事あり。然れども秀吉には對面櫻無し。秀吉は大英雄　我が國史の三千年間、大師と共に、靈俗二界の代表者となす。大師の英靈、若し共に語る可き者を求めて出現し玉ふなりせば、秀吉に、對面櫻無かる可らず。

◉對面櫻は秀吉に無くして、清盛に有り。此の二雄を對照せば、秀吉は幻覺無くして、清盛は幻覺有る可き人。對面櫻の傳說、極めて舊しとせば、吾輩を以て見れば、此の傳說は、寧ろ清盛の自白に本づくものならずんばあらざる可し。

◉侯大隈は、嘗て全盛の大浪人の勢ひを以て、登山せし事あり。彼は信仰の人に非るが故に幻覺無し。彼は大師の幻影を見たる事無かるべし。然れども彼や自信自强の志、餘りに盛んにして、高踏勇退の機を失すること數度なり。若し宰相の盛威を以て、更に登山して壇場に至るあらば、大師、對面櫻の上に現はれて、彼の晩節を戒め玉ふなる可し。

◉大塔は、雷火の災に罹りて燒けし事、天保十二年に至るまで總て三度に及ぶ。秀吉が再建せし時は、修理料二萬千八百七十石を寄附せり。此の塔の高大なるを以てして、而して避雷針無き世に、雷神の壘を摩したればなり。

◉明治十二年、大塔再建の許可を得て、勸奬を始め起工すと雖も、未だ其の

功を成さず。七堂伽藍を飾るには、必ず此の大塔無かる可らず。

◉大塔の鐘は、海内屈指の巨鐘、大師の建立に係る。鯨吼、一山に震ふの概、想見すべし。仁平三年改鑄の時、銅五千九百八十一斤餘、銀千九百六十一兩餘を要したりといへば、其の大と質とを知るべし。其の後、鐘樓、再び燒失し、一たび改鑄して今に至る。

◉壇場の中央に在るは金堂にして、七堂伽藍の巨擘たる可きものなり。四面周匝、各七間あり。七七四十九、即ち都率の四十九院を標すといふ。高廿五間。嵯峨天皇の御願にして、大師の創建に係る。屋瓦、高く雲表に入り、雷火の災に逢へること五回なりと聞く。

◉金堂は、實に、壇場の大立者にして、幾多の建造物に現はれたる、崇高、雄麗の觀を統一するものならずんばあらず。金剛峰寺と併せて、山中の二大壯觀とす。然れども彼は總菩提所の總務部たり。寧ろ此の金堂を以て、山中第一、

森嚴の觀を具するものと爲す可し。

◉此の金堂の本尊は、藥師如來、一丈六尺、金色の坐像、其の他、金剛薩陀、金剛王菩薩、普賢延命、虛空藏菩薩、不動明王、降三世明王を安置す。惡く大師の作なりと傳ふ。

◉大師の作と傳ふる佛像は普ねく海内に分布す。其の傳說をして惡く眞ならしめば、大師の彫塑力の偉大なること驚く可し。現代の彫塑家は、如何に健作なる者と雖も、未だ此の如き雄健にして超邁なる創作力を想像すること能はず。大師の彫刻に就ては、近來、專門家の間にも議論あり。然れども所謂大師の作と傳ふるものを以て、悉く眞なり、僞なりと斷定するを得ず。兎も角も、大師の創造力の廣大なりしは疑無く、殊に、高野山は、其の精神を傾倒したる靈場なれば、隨つて、彼が創作物の、多く存する道理なるべし。

◉フエノロサは、登山して、金堂を仰觀し、其の高雅無比なるを讚嘆して已ま

ざりしと聞く。何人も金堂の前に立ちて、敬虔、嘆美の至純なる情念に打たれざる能はず。蓋し啻に金堂の建築のみ然らしむるに非ず。其の美を爲すものは背景ならずんばあらず。

◉御影堂には、大師の尊像を安置す。尊像といふは、大師入定の前、御弟子眞如法親王が親く寫させ玉ひしなり。大師の肖像といふものは多く傳はらず。世間に傳播するものは、皆、此の尊像に本づく。

◉此の堂は槇尾の僧都實惠の建立にして、大師在世の時の持佛堂にてありし也金堂、大塔の間に介在し、此の堂ばかりは雷火の災に罹らず。丈高き金堂が、御影堂の爲に避雷針となりしに因るにも非ずや。

◉正暦五年、金堂、大塔、雷火に打たれし時、御影堂も火災に罹らんとせし事あり、此の時、堂の艮隅に、異相の童子現はれ、袖を以て炎を拂ふと見えしが遂に延燒を免かる。其の後、久安五年の火災にも、天風俄に吹き起つて猛火を

吹返したりと傳ふ。今の御影堂は、弘化四年、紀州侯の修築に係る。

◉大師の靈、威力を現はすものなりせば、啻に、自ら其の御影堂を保全するのみなる可らず。宜しく金堂を雷火より救はざる可らず。御影堂を保護するは大師の靈には非ず。諸天の諸佛、大師像の失はれなん事を惜みて、延燒を防ぐなるべし。

其十四

三鈷の松、登天の松、輪藏。八寸の金蛇、袈裟掛の松。

◉御影堂の前に三鈷の松あり。山中、最も有名なる松とす。此の松、姿態稍雅なり。大師の時の老松には非ず。應仁元年と元祿十三年とに植繼ぎたる故に、今の松は、第三轉の樹なり。

◉世に傳ふる名木の緣起には荒唐なるもの少からず。然れども此の松の由來の如く放膽なるは稀なるべし。大師、桓武天皇の延曆廿三年五月入唐し、唐の元

和元年、歸朝するに當り、海に臨んで誓つて曰く、日本に歸らば大伽藍を建立して、秘密の法を修むべし、此の杵、先づ往きて、眞言相應の靈地に留る可しと、即ち三鈷を執つて空中に向つて擲つ。三鈷高く揚り、飛ぶこと流星の如く雲に入つて往く所を知らず。大師、高野山に到りし時、飛行の三鈷、松の梢に懸りて光明を放てるを見たりと。

◎夫れ大師の大勇猛力を以てすと雖も、支那より日本に向つて、大海を踰えて三鈷を擲げ飛ばさん事、容易に非ず、現代野球投手の、到底、夢想するを得ざるところなり。而して大師、松下に立ち、三鈷を見て、喜んで、掌を開けば、三鈷自から掌中に歸るといふ如きは最も人間業に非ず。

◎大師の高野山結界文に據れば、此の山は、大師青年の日、既に自ら發見した る所なり。則ち大師が此の山に垂誕したるは、其の大成の後に非ずして青年の日に在り。在唐の日、歸朝せば高野山を開く可きを思ひて、此の山、つねに中

懷に往來したりしならずんばあらず。

◎大師、歸朝後、始めて人を率ゐて登山せし時、三鈷が松梢に懸りて在りしを以て事實なりとせば、恐らくは青年發見の日に、三鈷を此の松梢に、自ら懸けしなるべし。

◎一休和尚の詩に、手裡金剛飛放ㇾ光の句あるを見れば、三鈷の松の傳說は近世に始まるに非ず。由來、甚だ古きを見るべし。

◎壇場に於ける奇松は、三鈷の松の外、孔雀堂あり、登天の松の前に在り。堂は孔雀明王を本尊とし、役ノ行者作の孔雀明王を、其の御腹籠とす。七堂伽藍の中に、役ノ行者の一堂あるは、大師研究に於ける、感興ある一事項とす。

◎登天の松は姿態太だ奇雅、細幹、長く、斜めに伸びて、海老の鬚を刎ね上げたらんが如し。久安五年四月十日如法上人、生身の儘、兜率天に登りし時、此の松の梢より飛び揚りしと傳ふ。

◉白日青天、飛んで天に登るといふは仙人教の理想なり。然れども壇場には參天の喬木多し。必ずしも此の如き細長の松の梢より登らずもがなと思はれざるに非ず。

◉如法上人は獨り登天せしに非ず。弟子僧も隨つて登天せり。當時、弟子僧の手にせし杓子を落せしが、則ち經藏の前に在る杓子の芝なりといふ。登天の後は食事の必要無ければ、杓子を拾て、行きしなるべし。

◉然りと雖も、上人師弟の登天は甚だ慌たゞしと謂はざる可らず。杓子を持ちたる儘、登天すといへば、上人の登天を見て、弟子僧の狼狽したるが眼前に見るが如し。上人は、かねて登天の法を弟子僧に教へたるも、登天の日時を豫示せず、突然、登天せしならずんばあらず。

◉壇場の一切經堂に輪藏あり、參詣人は宜しく此の輪藏を廻轉して、菩提の種を蒔かん事を要す。經堂は、其の始、美福門院の御願に依り、紺紙金泥の一切

經を納めたるも、天保年中の火災に懲りて、これを御影堂裏の寶藏に秘藏し、現今の輪藏は、別に明治十六年の建立に係り、縮別藏經を納む。

◉輪藏は、支那の傳大士の發明にして、衆生をして、輪藏を一廻轉して以て、藏經轉讀の緣を結ばしむるもの。譬へば此の一廻轉は、所謂四萬八千日の一參詣にも比すべし。

◉藏經轉讀は大功德なり、然れども容易の業に非ず。輪藏を一廻轉するは藏經をパラ〳〵繰り返すよりも簡にして要を得る。佛者の方便に富めるは、此の如し。抑も方便無ければ、信仰は繫がれざるなり。

◉壇場の一名所は、猶ほ蓮池あり。大會堂の南下に在り。善女龍王を祀る。淳和天皇の天長元年、大旱魃の時、守敏僧都、祕法を修して、諸龍王を鈎召するに、善女龍王のみ來らず。此の龍王は、此天竺の境、大雲山の北の無熱池に棲み、靈威熾なり。大師乃ち更に自ら祕法を修するに、此の龍王、忽ち鈎召せら

れ、八寸の金蛇となりて池中に出現すといふ。

◉抑も八寸の金蛇を見て、誰か能く其の善女龍王たるを識別し得る者ぞ。但だ高野山は大師の王國なり。此の傳說は、大師の祕法の前には、靈威ある龍王と雖、八寸の蛇たるに過ぎざる事を象徵するに過ぎず。

◉壇場の名木の內に、西行法師の袈裟掛の櫻は逸す可らず、西行は人格高邁にして、出家の後と雖も、風雲の氣尙消せず。昔より此の山に登りて、感慨を逞くせし僧は少からざるべし。竊に、大師の英靈を招きて歸りしは西行ならずんばあらず。

其十五

金剛峯寺、流血の哀史、大師の英靈、秀吉を走らす、秀次の末路。

◉吾輩は壇場を歷拜し、踵をめぐらし、常喜院の裏と、聯合大學の前を過ぎ、金剛峯寺に至る。金剛峯寺は、高野山座主寺、大師の高弟眞然僧正、住職たり

しより今に至るまで三百五十餘世、其の建築は東西三十間、南北三十五間、本尊は大師。歷朝の尊儀を安置す。

◉金剛峯寺は、四面、鬱蒼たる森林に圍まれ、其の本門、入口の左右に、高野槇と高野杉と、山木を代表して立てたる、流石に威儀堂々、如何にも座主寺らしく見ゆ。

◉此の寺、中興、應其上人の時、秀吉、再營の事に任じ、改めて靑巖寺と號したるも、明治初年、再び舊號に復せるなり。

◉高野山の中にても、此の座主寺ばかりは、參詣人に拜觀を許さゞりしを、近年、公許することゝなれり。梅の間、柳の間、奧書院、廣間等あり。襖の畫、梅の間は梅月流水、柳の間は雪柳白鷺、ともに探幽の筆、奧書院の墨畫は雲谷等益、而して廣間の金地に群鶴は元信の筆に成り、渾厚、莊麗、殊に愛すべし。

◉金剛峯寺の柳の間は、悲劇の舞臺なれ。文祿四年七月十五日、關白秀次、太

閣の旨に忤ひ、切腹するの處。聖なる高野山に血を流したる唯一の哀史となす柳の間といふ名、自から秀次、萬斛の恨を藏するやに思はれて凄し。

◉秀次が高野に入りたるは、必ずしも死を惜むとのみ速斷するは酷なるべし。當時、事迫る。多少の猶豫を得んとする、唯だ此の山に遁入するの外ある可らず。

◉太閤の盛威を以てするも、高野山に遁れたる秀次を殺したるは、暴といはざる可らず。秀次の羽翼を、悉く殺ぎ盡くすも妨げず。此の山に籠もりし秀次の一命ばかりを助く可かりしなり。

◉遮莫、出家より再び天下を狙ふ者、足利將軍に、既に有りて秀吉の知悉するところなり。秀次、山に入りたればとて、強ち枕を高くす可きにも非ず。秀次の切腹、必ずしも太閤の暴威とのみ言ふ可らざるに似たり。但し、山中に血を流せしは、飽まで、太閤、其の責を逃るゝを得ず。

◉實は、秀次の暴行は目に餘りたる態度あり。秀頼生れたる後の彼は、自暴自棄の姿にして、事毎に、眞面目を缺きたり。必ずしも謀叛などゝいふ大袈裟の計畫にも非ず。寧ろ捨身の亂暴といふ可し。然りと雖も、其の亂暴といふも無邪氣には非ず。騎虎の勢、知らず〳〵謀反の深溝に自ら落ち行きたるものなるべし。

◉秀次切腹は、高野山史に於ける大汚點なり。此の前年、太閤、盛儀を凝らし龍山公、家康、利家、毛利、蒲生等の諸侯を率ゐて登山し、大師英靈の威力に驚天せし事あり。流石に此の大英雄も、心臟の鼓動、尚未だ靜らず。其の翌年直に再び靈威を侵して、此の靈場に血を流さん事を命令せんこと疑はし。

◉文祿三年、秀吉、吉野の花を賞し、續いて天瑞院三回忌追善法會の爲に登山し來る。諸侯伯の行列、美々しきに加ふるに、幽齋、紹巴、由巴等、風騷を以て盛事を謳ふあり。古來、是ほどの盛大なる登山者あらず。秀吉、志漸く大師

の英靈に驕らんとす。

◉大師の遺法、禪定を妨げんことを嫌ひ、牧笛さへも禁じたりと傳へらる、太閤は大衆の懇請をも聞かず。『新作の高野詣を謳はしめ、能樂を興行する時、一天俄に大風雨、天柱傾き、地維も崩る可く、太閤、驚き慌て、馬に鞭ち、千手院谷の山道より、兵庫村の護國寺に遁る。

◉大師の英靈、古今無雙の太閤を驚奔せしめたるは、痛快とするに足らずんばあらず、此の靈現に感じたればこそ、太閤、更に高野山を崇敬し、大塔、金堂以下廿五棟の再興を命じたるなり。

◉秀吉と秀次との關係は、非養子論者の一材料となる可きものなり。秀吉が年老ゆる迄、實子育たず、秀次を養子としたるは致方無し。彼程の大英雄なれば養子をせずともと、思ふ人もある可けれども、秀吉とても、限無く、世情を超脱することは能ふまじ。

◉秀頼生れたる時、秀吉と秀次との間には、溝壑を生じぬ。されど、秀吉も未だ秀次を惡むの心は無く、秀次とても機先を察して、身を保つの機會は有り餘りたり。

◉老年に男子を生むは、人間の一不幸ならずんばあらず。英雄老いて、拔山蓋世の力緩み、夜鶴の愛情の爲に、頭中に八重の霞を崩え立たしむ。秀吉が秀頼秀次二人者の爲に、速に分限を定めざりしも失策たるを失はざるも、秀次、愚にして權勢に執着し、左右に謀臣無かりしは惜む可し。

◉聚樂物語は、秀次の末路を傳ふるの書なり。此の中に、木村常陸介、秀次に謀叛を勸むるの事見ゆ。其の說に、夫れ弓取は、親を討ち子を害しても國を治め天下を保つは習ひにて候と云へり。信長、秀吉の生涯より見來れる秀次が此の說に、耳を傾けしも有理なりと思はる。

◉假令、秀吉を討ち得たりとも、秀次の手に、群雄を駕御し得可しと思ひしな

らば、秀次の痴、光秀に讓らず。吾輩を以て見れば、秀次、謀叛の志ありしとせば、彼は前後の分別も無く、勢に壓され、情に驅られて、謀叛を強ひられたるものならずんばあらず。

◉秀次を豐臣氏の第二世と思へばこそ諸大名も二心無く敬屈したるなれ。秀頼の生後は、人情、自から秀次に遠ざかるの形勢無き能はず。此の形勢に立ちて秀次ぐらゐの人物にて、終を完くせん事、容易ならず。

◉秀次が高野山に逃げ入りたるは、彼の爲にも誤りなり。彼が輿車に乘つて伏見に往く途中に、既に討手の向へるを識りたる時、從士の諫めし如くに、東福寺に入つて、心靜かに切腹す可かりしなり。

◉彼が高野山に入りしは、增田長盛の進言に本づくと傳へらる。長盛は、秀次の爲を思ひ、何卒彼の一命全かれと祈りての說なる可し。然れども此の時、秀次、既に俎上の魚たり。保全は思も寄らず。唯だ如何にして、最後を潔くす可

きかの一事、殘れるのみ。

◉登山したる秀次には悔悟の心のみあり。剃髮して道意禪門と號し、從者も悉く髻を切放ちたる時、毛頭野心無く、一生の罪過全く思ひ當りぬ。悲しき關白の末路かな。

◉秀吉が福島正則を派遣したる時、必ず山にて斬れとは言はざりしなるべし。山より出して討たざりしは、福島の智慮足らざるなり。秀吉が、此男を差向けたるは、赦意無き事を示したるものならずんばあらず。

◉大師、若し秀次助命に意あらば、狂風を起し、霹靂を下し、軍勢をして登山せしめざりしなるべし。秀吉すら駈け散らしたれば、福島を追下すは、固より難きに非ず。彼が切腹の日も、前日も、不幸にして好天氣なりき。秀次は、能く能く大師に見放されたるなり。

其十六

高野山と織豐二氏。信長死せりと叫ぶ聲。

◉戰國の時、南都、北嶺の外、高野山は、更に、方外の一勢力となりて現れたり。多くの僧兵を蓄へ、天險に據り、勢、堂々として、儼然たる一諸侯に對敵するに足りしは疑ふ可くもあらず。高野山が織田、豐臣二氏と接觸するに至れるは必然の形勢なり。

◉高野山は、戰國に處して、自衞の方策を建て、衆徒を結束し、地勢を相して大和國宇智郡の阪本二見の二壘を作り、儼然として構へたり。此の山は南都、北嶺の如く京都に近からず。二山の如くに事を好みし形勢も見えず。僧兵を組織したりといふも、專ら七百年來の靈場を守護するに力めたるなりといふを得べし。

◉此の山、啻に無雙の靈場たるのみならず。北、大和、河内に臨み、南、紀伊

に據り、得難きの要害たり。山峻に、谷深く、進んで中原を爭ふ可らざるも、退いて一方に割據するに餘あり。上國戰亂の時、群雄、必ず此の山に着眼せざるを得ず。況んや信仰の勢力の蓄積するところ、牢として天險を固むるに足るものあるに於てをや。

◎足利義昭、奔つて此に據らんとするも、荒木村重の餘黨、此に據るも、共に同一般の徑路より來る。維新の時、今の伯田中光顯等、鷲尾隆聚を奉じて此に出向するも、亦逸早く此の山を占めて、上國の南を固めんとするに外ならず。

◎此の山徒等、義昭の依賴に應ぜず、又た紀州の鈴木孫市の一揆の時、信長に應ぜざるは、不羈中正、獨鈷を左にし、劍を右にして、以て、靈場を護らんとするの精神見ゆ。假令、僧兵を結束すと雖も、信長の怒に觸るゝこと無し、唯だ已むを得ずして荒木の餘黨を庇護するに至つて、始めて信長と爭端を開く。實は、山徒の本意にては非りしなり。

◎戰國の英雄、僧兵に惱まされざるは莫し。家康も然り、信長も然り。而して殊に、報復の猛烈なるを信長とす。天正九年八月晦日、信長が安土の市外、京都七條磧、伊勢の雲出川の三所に於て、千三百八十三人の高野聖を一擧に殺戮したるは、彼が高野山破却の烽火たる所以にして、其の暴斷も亦た甚だし。

◎信長の末路、佛罰に因すといはる。叡山と本願寺とは迫害を受くること特に深きを以て、信長を呪へる事も亦烈し。然れども高野聖の怨魂、若し祟を爲すあらば、此の一事を以てするも、信長、大往生を遂ぐるを得じ。

◎信長の高野山包圍攻擊は、天正九年十月二日に始まり、翌十年の六月二日に渉り、捗々しき手際も見えざりし中に、信長の宿運盡きしか、山僧の祈禱、効驗ありしか、大師、靈場を惜しみ玉ひしに依る乎、信長、本能寺に斃れつゝ攻圍軍潰ゆ。

◎傳說に據れば、織田氏の攻圍軍潰ゆる時、奇蹟、實に少からず。兎も角も、

信長と戰つて、幸に其の馬蹄の塵を受けざりしは、此の山のみなり。

◎高野山は密敎の靈場、祈禱の大本山たるは言を須ゐず。此の山、千年の歷史に於て、祈禱の力を發揮したるは、信長と抗戰の時に過ぐるは無し。高野山は、實に、獨鈷と珠數とを以て、佛敵と戰ひたるなり。

◎傳說す。彼等が大元帥の大法を行ひ怨敵降伏を祈りし時、行方衆は手鎗を提げて修法を警固し、伴僧等が誦呪に倦まんとするを見れば、手鎗鼻端に閃めかして、眼を驚かす。祈禱の聲、谷々、院々に響きて木魂を壓し、護摩の烟、山中を繞つて渦卷き騰る。

◎陣中に年は晩れて、天正十年の元旦來るや、例に依つて朝拜を行ひ、修正會、仁王會つゐの如く修行して怠らず。是れ山僧、陣中に閑日月あるに非ず。修法、護法の意氣、此の如きものありて、始めて能く佛敵を防ぐを得たるのみ。

◎山僧は劍戟を執つても善く戰ひたり。而して抗戰の續くに隨つて、修法の勢

ます〳〵加はる。信長最期の日なりし乎。壇上の御社にて怨敵調伏の祈禱を爲すに、天井より生首二つ舞ひ下り舞ひ下る。夜、修法の時には、不動明王の御剣に鮮血滴り、數十の燈明、風無くして一時に消ゆ。

◉六月二日の午前十時頃なるべし。葛城山の一角より黑雲、油然として湧き、見る〳〵高野山を蔽ふや、雲中の電光、陣々を射て眩ゆく、雲中に聲ありて、信長死せりと叫ぶ聲、凄し、果然、本能寺の凶報、敵陣に飛來し、攻圍軍の退くに乘じ、山徒は追擊して、勝てり。

其十七

高野山の最盛時。秀吉と高野山。太閤墓。

◉此の抗戰の勝利は却つて高野山をして大ならしめ、其の所領、近國、他國を合して二千六百十三村。石高十七萬三千餘石に及びたりといふ。即ち開闢以來、高野山の最盛時なり。

◉最盛の高野山も秀吉の盛威に及ばず、其の後三年、秀吉、自ら根來、熊野、高野山の三山を伐するに當り、根來は、淺ましくも大師の御命日に落城し、熊野は風を望んで降り、高野山も木食上人の斡旋に依り、秀吉と和談し、本領一たび安堵せり。

◉秀吉の異母弟秀長、大和に封ぜられ、其の所領、紀和二國に跨り、大和の良田は興福寺に、紀伊の良田は悉く高野山に占めらるといふを以て、頻に秀吉に訴へ、秀吉も、其の煩に堪へず、遂に高野山の所領を沒收して秀長に與ふるに至る。

◉高野山の最盛は、かくして忽ちに去りぬ。然れど間も無く、秀長、富貴庄に獵し、大蜂に螫されたるが本となりて病死し、其の子の秀俊も早世したるは、佛罰なりと、此の山にては思へるらし。

◉其後、秀吉は山徒の懇志を多とし、木食上人の斡旋もあり。新に所領萬石を

寄附す。最盛の所領を奪ひたるも秀吉なれど、堂塔を再建し、『太閤基』を建立して大名墓の發端を爲し、新らしき高野山を出現せしめたるも秀吉なり。高野山は秀吉に依つて、新舊の大段落を爲すものならずんばあらず。

◉吾輩は、金剛峰寺を歴覽し、柳の間より、御幸の間、親王の間等を拜觀し、裏緣をぐるりと廻つて、大廣間に出づ。去るに臨みて、高野帳を出して寺印を求めしに、與へず。

◉近年、スタンプの趣味、普及し、神社佛閣の印を求むる者、啻に、遍路者のみならず。ひとり金剛峰寺は、高く自ら標持して、スタンプを與へざるなるべし。

◉大帥の高野山結界文に、あらゆる天神地祇及び本朝歴代、皇帝、皇后の尊靈を以て檀主と爲すといへり。檀主は施主なり、旦那といふと同じ。金剛峰寺は即ち皇室に關する菩提、供養の事を專らとし、及び宗務を總轄し、其の餘の佛

事を營まず。自ら他の尋常寺院と異なる態度無き能はず。

◉山中の坊々、自ら二三の諸大名を所定の檀主と爲し來れり。而して其の領地の士農工商の參詣の爲に宿舍を爲せり。唯だ金剛峰寺ばかりは宿坊を無さず。皇室の菩提寺を以て、自から任じ來れるなり。

其十八

珠數屋。小田原町、石童丸と蓮生坊。

◉吾輩は金剛峰寺を出で、左折して寺前の小川に沿ひ、郵便局、警察署を過ぎ、珠數屋に到る。昨夜の奉祝祭に白粉を施して、歌ひ騷ぎたる顏の、今日の、晴れ晴れしたる日和に、眞面目に、店頭に並べるよ。

◉珠數屋こそ山の町にても最も因緣深き店なれ、寺といへば珠數といふこと譬へば鑿といへば槌といふが如し。高野山に未だ町無かりし時だにも、此の珠數屋の二軒のみありし。即ち高野山町の草分は珠數屋なり。

◉女人禁制の解かれて後、漸く、山上に町の建ち初めしも、町屋は男ばかりにて、女を置かず。女を置くに到りても、店頭には必らず男を坐せしめ、女は土鼠の如くに、其の存在は明らかなるも、表を行く人の目には觸るゝこと無かりき。

◉町の女が、初めて店頭に出沒するに至りしは日清戰爭の時、主人、番頭等が豫後備兵として召集せられたるに在り。土鼠は漸く日光に馴れたり。而して日露戰役に至つては、召集、徵發の盛んなりしが爲に、町の男子、著しく減じ、女は居然、店頭に坐して、商事を經營するに至れるなり。

◉日清、日露の二大戰役は、あらゆる方面に於て、日本を發展せしめたるのみならず、高野山町を町らしくしたるも、此の戰役の賜なり。町に看板娘を有するに至れるも、其の賜なり。

◉珠數屋といふとは雖、よろづ屋なり。高野山のみやげとす可きものは、何物

をも賣る。吒羅尼助、其の外の藥、箸、くり細工、繪葉書等あり。珠數にも水晶、白檀、種々あり。山中に生ずる菩提樹の實を綴れるもあり。吾輩は菩提實の珠數を購へり。

◉珠數屋より小童をして、吾輩を、奥の院に案内せしむ。これより奥の院まで三十餘町、案内者を出すは、珠數屋の古例なり。而して古來、參詣人は、必らず珠數を求むるを以て案内料を受けず。今のハイカラ者の、珠數を購はざる者には、他の記念品を購はしむ可く、然らざれば、案内料を請求するも可なるべし。

◉吾輩は常喜院の稚僧と、珠數屋の小童と、椎出町より伴ひ登山せる擔夫との三人に導かれて、珠數屋を出で、奥の院に向ふ。目に觸るゝもの、交々、其の說明を三人に聞きつゝ行く。

◉珠數屋より奥の院の入口に到るの間店舗のあるところ、之を小田原町とい

ふ、小田原の名の起原は別に有るべし。兎も角も長き町なり。

◉小田原町には、店舗と宿坊と交錯せり。飲食店の小さきもあり。佛書を專門とする書店も有り。呉服店もあり、虎善と稱へ、店頭に、虎を飾れる藥鋪もあり、唯だ宿屋無きのみ。

◉町の中程に、右側に、苅萱堂、熊谷堂あり、苅萱道心の名は、高野山に結び付けらるゝ事、大阪の秀吉、熊本の加藤清正の如し。然れども苅萱道心は高野山に於て、何等の事業を留めたるにもあらず。其の傳說、如何にも悲哀に滿ち、惻々として人心を動かす。彼の一生は佛法の上に貢献すること無しとするも、彼は高野山の名を弘布するに於て、功無しとせず。

◉苅萱道心は筑前の加藤重氏、歷史上の事實は暫らく措き、一箇の歷史小說を爲す。彼が出家の動機。燈下に對坐して睡れる妻妾の頭髮、化して蛇となりて相爭へるが、障子に映ずるを見たるに因るといひ、石童丸が獨り父を山中に索

むるの哀、母は山下に留まりて、憐れにも客死するに至るまで、すべて絶世の悲劇、また以て得難きの佛敎小說たるを失はず。

◉吾輩、嘗て、大師の「いろは歌」を論じて、佛敎に對する廣告文學なりとせり。其の事、今、玆に絮說せず。然れども吾輩、今に至つて、かく信じて疑はず。苅萱道心の事、高野山中、錦心の僧ありて、巧みに此の絶妙の佛敎小說を脚色したるならずんばあらず。

◉苅萱父子は、後年相携へて山を下りて、諸國の靈蹟を巡拜し、善光寺畔に廬を結びて終れりと傳ふ。吾輩、先年、始めて長野市に遊びし時、霜の夜に町を行きて、苅萱堂に、若き人が、燒火して夜を守れるを見たり。燒火の烟の末に浮ぶ月下の苅萱堂、今また髣髴として心頭に來る。

◉此の苅萱堂には、繪堂を設けて、道心、石童丸の生涯を繪解す。若き堂守、吾輩を導き、鞭を揮つて、說明す。成句、悉く諳誦より出で、流水と共に滑ら

かに、淀み無く、節調、面白く和讃を爲せり。聞くに飽かず。

◉繪堂は、割合に、石童丸の出生の前までに詳にして、其の出生より生長の間は省略せられたり。實は、此の間の事、傳へ難く、而して說くは、冗、且つ拙なり。

◉吾輩、堂守が、如何に、此の間を說明するかと、諦聽しつゝあり。堂守は憶せず說き來つて、『生れたるが石童丸、光陰、箭の如く』と言ふ。吾輩は、聽いて、此の一句に至つて、覺えず微笑す。和讃文學の、なか〳〵に洗錬されたるを見よ。

◉熊谷蓮生坊が高野山に修業したるは、年時最も長し。其の舊蹟、熊谷寺持寶院は則ち源空、親鸞兩上人の舊蹟なり。蓮生坊は源空上人の弟子なれば、上人を賴みて登山したりしなり。

◉彼が出家の動機は、實錄に據れば建久三年、久下直光と地界を爭ひたる時に

在りといふ。地界の爭訟に據るといへば、太だ俗なるに似たり。然れども粉骨碎身して百戰の後に得たる恩賞の保ち難きを見て、世を傍みたるも無理ならずとすべし。

◉淨瑠璃に見る熊谷父子の悲劇は、古今の傑作なり。吾輩、熊谷坊に來りて、忽然として、昔、見たる圍十郎の熊谷を回憶せざる能はず。圍十郎の諸役の中にても、熊谷を、最も深く印象したりしなり。

◉一の谷の幕に、熊谷が敦盛を呼び掛けながら、馬を躍らして花道を舞臺にさし掛り、二三度、馬を輪乘して軍扇をサッと開きたる武者振の雄々しさよ。次に、陣屋の段、藤の方との對面に、飛び退り、「敦盛卿を討たる次第物語らん」と、坐を構へたる姿の立派さよ。實に、熊谷直實は、かくまで見事なる武士なりし乎。一の谷を物語れる圍十郎の音吐、美聲、縹緲として耳に在り。干乾びたる如き熊谷坊の前に立てば、かの颯爽たる英雄が頓悟して、墨染の衣に、や

つれて暮らしゝは、此處かと、涙、自ら落つ。

◉熊谷は、承元元年二月、源空上人配流の事を聞きて山を下り、黒谷に歸りて、翌年の冬、示寂したれば、此の山に住みしは十五六年間の久しきに渉りしなる可き乎。

◉熊谷坊と菊萱坊と並びたれども、此の山にては、さばかりの熊谷も菊萱に壓せられて見ゆるは口惜し、源平盛衰記に據れば、石童丸は平維盛の從士にして主に隨つて登山、剃髪して、戒圓と號したりといふ。

◉盛衰記に見たる石童丸は、熊谷と對比す可き名ある士には非ず。石童丸は平家方、熊谷は源家方なれば、文學ありし平家方の人、石童丸の哀史を脚色したりし乎。

◉抑石童丸は可憐の人物にして、山僧にも悲しがられ、其の半生にも、哀れなる物語の有りしにも依つて、さばかりの勇士にもあらざれど、當時、山中に

持て囃やされし新發智にてもありしにやあらん。

◉小說の蓮生坊と石童丸とは、共に悲劇を以て喧傳せらる。然れども蓮生坊は其の愛子を犧牲にし、石童丸は慈父を慕ひて苦行す。同じく悲慘といふと雖も其の中、自ら徑庭無きにあらず。偏に憐れなるは石童丸の方に有るべし。但、武士道の意氣を貫きたる苦節は、淨瑠璃の熊谷に歸す。世間、高野山といへば多く石童丸を語つて熊谷に及ばず。吾輩、特に、熊谷を標出す。

其十九

奥ノ院の一ノ橋。濃口入道と横笛。清淨心院。横笛と西行。

◉金剛三昧院の多寶塔は、鎌倉二位尼の建立に係り、特別保護建造物たり。美福門院の御陵は西谷不動院に在りと聞けど、一見の機を得ずして、忙はしく過ぎぬ。

◉小田原町の盡くる處、奥の院の一の橋に到る。大門より廿八町、女人堂より

十八町許り、東に在り。檜、槇、杉などの喬木、眞黑に壁立し、其の間、一條の道路洞道の如くに通ず。一の橋は此の洞道に向つて、清溪に架す。

◉町の端、右には茶店あり、みやげものを賣る。高野槇の枝の束ねたるもの及び槇、杉などの苗もあり。左は清淨心院、山中第一の巨坊或は副本山と稱す。山に倚つて、斜めに庭を構へたるが麗はし。山上、白石、累々として、散布し、墳瑩を列ぬるが如く、鳥部野を望むの思を爲すもの、實は、白石には非ず、古木の切株の、雨に曝らされて、白石と見ゆるなり。

◉清淨心院谷の入口に、瀧口入道、横笛の鶯梅といふものあり。堺外より枝頭を望見したるのみにて、入りて見ず。瀧口入道の住山したる時の庵室を多聞坊といひしと傳へ、又た梨の坊にも住みて、横笛の戀魂、鶯と化して、慕ひ來り、梅花に啼きしが則ち鶯梅にして、鶯の死したる井戸をば鶯の井といふと傳ふ。

◉瀧口入道が、此の鶯の爲に三尊を刻み、鶯阿彌陀と號し、大圓院に現存すと

聞く。

◉横笛は、瀧口の事を聞きて、其の志に感じ、自ら嵯峨の奥に、瀧口を尋ね來て、念佛の聲をしるべに訪れたるも、瀧口は、其の横笛なるを識りて、わざと逢はず。後嵯峨を出でゝ高野山に登れり。横笛も亦髮を切り墨染の衣を着て、奈良の法華寺に在りしが、想の數の積りし爲にや、幾程も無く果敢なくなりしといふ。

◉如上は平家物語の記するところ、源平盛衰記には、異說あり。瀧口、嵯峨の奥、法輪寺にて出家し、阿淨と號す。横笛、尋ね行きしに、居ずと答へて逢はず、横笛泣く〳〵都に歸りしが、思餘りて、遂に、大堰川に身を沈めぬ。

◉瀧口、横笛の死を聞き、速に水練者を賴み、遺體を搜り得て、火葬して骨を拾ひ、首に掛けて、山々寺々、修行、遍歷しつゝ、遂後に高野山に登りしとなり。

◉平語、盛衰記の二書、瀧口を傳ふるもの、此の如く相違あり、然れども相違の點の要領は、横笛の身上に在り、奈良の法華寺にて病死せしと、大堰川に投死せしといふ相違なり。

◉横笛は、兎も角、優にやさしく、ものゝ哀を知れる女なりしと見ゆ。横笛の事、始より小說的悲史なり。眞事實は、水死か、病死か、いづれなりしにもせよ、今に於て其の眞否を考證するに及ばざる事なり。

◉彼女は、到底、小說の人なり。但だ彼女が、美しき姿を墨染の衣に包み、みどりの黑髮を切り、奈良の法華寺にて、泣き崩れ、やつれ果てゝ、想ひ死に死したりといふを、大堰川に投死したりといふよりも、限り無く憐れに、いぢらしき女と見ゆ、衰死したりといふが、横笛には適さはしかるべし

◉別に異說あり。瀧口入道が高野山に入りし後までも、横笛は死せず。瀧口を慕ひて、尋ね來りて、山麓の天野に住み、瀧口の爲に、袈裟、法衣などの洗濯を事としたり。瀧口は住山、すでに五六年に及び、或は瀧口入道と呼ばれ、多くの村人どもには、高野上人と稱へられしとも傳ふ。

◉此の異說には、瀧口と横笛との末路を傳へずと雖、這般の經路より推し行けば、此の二人者は、年老に至るまで、戀を法に替へて、法の友として、清操を維持したる可き乎。或は、末遂に、夫婦となりて、圓滿なる大團圓に終りたる可き乎。

◉此の異說は、必ずしも二人者が夫婦となりしといふ事を明かにせざれども兎に角、此の二人者は、人情を以て淸き交を爲せる事を意味す、極めて横笛を常識化せる傳說なり。横笛をして、若し今の京女ならしめば、かく有るべきにや。

◉横笛が、山麓の天野に住みしといふ傳說は、西行法師の事を附會し、或は混交したるにやあらん。西行が始めて高野山に登りしは、承安年中の事にして、瀧口よりは十年の前に在り。

◉西行が、大會堂の東、三昧堂にて修禪したるは、山家集に、「三昧堂の方へ分けまゐりて、秋の草ふりかはり、鈴の音、かすかに聞えて、あはれなりければ」と書きて、「おもひおきし淺茅が露を分け入れば、たゞわつかなる鈴蟲の聲」の一首の歌あるにて知るべし。三昧堂の前に、今も、西行櫻あり。

◉西行は、會堂阪の靈山院に住せしと傳ふれども、遺跡、今、無し。山中に於ける吟詠少からす。山家集に載す。其の一、「高野山、あかつきを待つ峯にても更るは惜しき秋の夜の月」高野山は、歌詠まぬ身にも、歌思はるゝ處なり、わきて高野の月は、情趣盡きず。此の一首、山上の月と、月に對して歌ひし西行とを髣髴せしむるに足らずんばあらず。

◉山家集に、「高野の奥の院の橋の上に月明かりければ、諸共に詠めあかして其頃、西住上人、京へ出けり。其夜の月、忘れ難くて、また同じ橋の月の頃、西住上人の評へ言ひ遣はしける」と題して、『ことゝなく君戀渡る橋の上に、あら

そひけりな月の影のみ』。

◉此の歌に云へる奥の院の橋といふもの、一の橋か、中の橋か、玉川に架した る御廟の橋か。今は奥院に橋三あり。西行は、唯だ奥院の橋とのみ云ひたれば、其の孰れの橋なる可きやは詳らかならず。然れども歌意を以て推すに、御廟橋にてはある可らず。

◉吾輩を以て見れば、西行が西住上人と共に、月明に憧がれしは、今の一の橋ならずんばあらず。御廟橋ならしめば、玉川を背景として言ふなるべし。單に奥院の橋といふ時は、一の橋を指すを常理とすべし。

◉今、一の橋の邊、町家の見ゆれども、昔、小田原町無かりし七八百年の前に在つては、奥の院の喬木森然。峰、西南に遠くして、水、潺湲として、鳴つて橋下に流る。まさに月明の好景なる可くして、而して西行が、其の住坊を出で月下にそゞろ行きするには、至當の處なる可かりしをや。

◉西行が月に歌ひしを一ノ橋とすれば瀧口の住せし遺蹟の清淨心院の附近なり

西行が下山せしは、何時の頃なりしやを明らかにせずと雖も、瀧口の來りし時

西行は山に住みしなるべし。

◉西行は山を出で、諸方に遍歷し、晩年、山麓の天野に住み、建久元年二月十四日、天野にて遷化す、其の頃、彼の妻も天野に來りて、尼となりて住みたりといひ西行妻子三人の墓あり。後世、其の遺蹟に西行堂を營みたるも、今は無し。

◉西行が、天野にて田を作りし時の歌なりとて、「西行が、たま〳〵つくるはざま田の、尻のせまちの乾るぞ悲しき」の一首を傳ふ。

◉晩年の西行は、家庭を樂しみ、世情的生活を營みたるなり。天野に於ける瀧口と横笛との傳說は、西行妻子の事を混入するものに非ずや。

其二十

俊寛と高野山。明遲杉。横笛の補說。

◉俊成卿も登山し、入道して寂阿と號せしが、別に事績を留めず。驕れる平氏の全盛の崩れ初めし頃より、世を避けて高野山に入りし者、少からず。

◉平家滅亡の前、俊寛は鬼界ヶ島に竄死したりしを、侍童有王丸、遙々京より下り、遺骨を奉じて、治承三年五月、登山し奥の院に斂め、發心入道して、故主の寃魂を弔ひしといふ。

◉俊寛の謫死は、實に悲劇なり。馬琴の俊寛僧都島物語が世間に歡迎せられしは、俊寛父子の悲劇に對する後人の同情に基づく、俊寛の女が、京より島に送りしといふ文は、其の傳の眞僞は知らず。辭氣惻然として人を動かす、千古の絶唱とすべし。然れども有王丸は未だ高野山に於ける立者とはならず。

◉有王丸の悲史は、石童丸の下に在らず、鬼界ヶ島より高野山に到るの間、海山數百里、故主の遺骨を懸け涙を拂ひつゝ來る。行程、定めて悲痛の事實少しとせざるべし。關西、九州には、往々、俊寛の墓、或は遺蹟と稱するものあり。

若し是等の遺蹟を辿り、事實を點綴、假想せば、脚色に富める一篇の歴史小說を爲す可きなり。

◉俊寛の怨魂、高野山に登りて佛果を得し後は卒知らず。島に在りし時は定めて、平氏の滅亡を詛ひしならん、彼は生きて平氏の滅亡を見ずと雖も、遺骨、山に入るの後、維盛、遁走して登山せるを見し時、泉下の靈、始めて微笑、成佛せしならずんばあらず。

◉信西入道の子が、父の菩提を弔はんが爲に、永暦元年、登山して、善智識となり、明遍上人と呼ばれたるは、有王丸の登山より二十年前の事なるが、此に至りて、信西も、俊寛も、敵も味方も、等しく佛果を得たるなるべし。

◉明遍上人は、杉の杖をつき、奥の院に詣で、御廟の橋に到り、杖を地に挿して佛果を祈りしに、本願空しからず、杖より、やがて枝葉崩え出で、喬木となれり、明遍杉は則ち是なり。

◉明遍上人は、初め法然上人に念佛の義を受け、後ち蓮花三昧院に入りて唱名怠り無く、平氏の末世に入山してより、源氏三世の盛衰を見、更に北條氏の興隆、承久の大變を歴て、下界は則ち滄桑の變頻りに到るの間、獨り靜かに、山上に、眞如の月を眺むること六十餘年、元仁元年六月十六日、遷化す、彼に隨つて登山せし下僕の八人も共に入道せしを、八葉の聖といふ。されば彼が遷化の頃、聖の八葉は、或は多く凋みしなる可く、彼が初めに、大師に祈りし明遍杉は、生前に、既に拱せしならずんばあらず。

◉信西は元來、非常の法器、然れども俗緣盡きず、天命を知りながら、非業の死を免るゝ能はざりし。彼をして早く天命に安んぜしめなば、明遍に先だち、高野山に隱る可かりしなり。然れとも信西の最期は明遍の爲に、却つて得道の善智識となりしなるべし。

◉瀧口、横笛の事、猶ほ補ふ可き事あり。上田秋成が「浮氣は一花嵯峨野の片

折戸」といふ文の中に、姉小路の富商の子、大黒屋富太郎、放蕩の餘に勘當せられ、島原の桔梗屋の花野太夫を身受し、嵯峨野の奥、妓王寺の邊を借りて、面白盡しの宿這入、男も女も紙子仕立、藤色羽二重に媚茶繻子の火打、下には白絖の反古染、心一ばい物好して、男は名を瀧口、女はお笛と改めて　平家座頭に謠はれたさの風流と記せるは、瀧口、横笛をデカタン化せるものなり。

◉嵯峨野は瀧口、横笛の舞臺なり。流石に、嵯峨野の秋の暮、壁に鳴く蛬、窓に音づるゝ棹鹿、されど酒無くては月も面白からず。此のデカタンの男女は唯だ不自由の、身に浸み行くばかりにして、月にも風にも、悟は開けず。

◉隣りの菴は鉦の聲、妙に聞えて、六尺許の大坊主なり。無間の鐘介といひて東海道を働きし追剝なりし。向の庵主は六十有餘の浪人、實體に見ゆる人相、能く聞けば擬筆士、かく知りては、此の男女、暫らくも此に住みかね、潛に京に逃げ歸り、親々に詫びて、尋常の堅氣息子となれり。

◉嵯峨野の奥に隱るゝとても、生ける間は、浮世の風に吹かれざる能はず、浮世の風に、長く吹かれなば、瀧口、横笛とても尋常の人となるべし。横笛の早く死したるこそ善けれ、若し長く生たらんには、眞に、天野に來りて、瀧口の法衣を洗濯せしやも知れず。

其廿一

西行、佐々木高綱、一蓮托生、維盛と瀧口。

◉西行の歌に、高野に侍りける頃、草庵に花の散りければと題して、「散る花の庵の上を吹くならば、風入るまじく、めぐりかこはん」の一首あり。

◉高野山の庵は、四方、峯に圍はれたれど、尙花を吹く風入る。浮世の風も亦た吹き入る。花上の風の防ぎ難きが如く、浮世の風、防ぎ難し。花上の風は則ち浮世の風なり。西行の歌意、單に花を歌ひし乎。抑また寓意もありし乎。

◉西行は山に入つて、又た山を出でたり。山に飽きし乎。別に意ありし乎。行

雲流水の身、留まるも動くも、意無かりし乎。或は、此處も亦た浮世なりけりと思ひし乎。

◉人を避るを得べし、世を避け難く、世を避くるとも、世の風は避けられず。平氏の末世に、世を避けんが爲に、高野山に遁れし人は、實に多し、而して其の多くは、留去、一定せず。或は山に出入し、或は山を出で、山を下りて死したるが多し。

◉坊城宰相入道成賴は、治承三年の末に、清盛の凶焔を避けて登山し、體蓮房と號したるが、建久六年九月廿一日、其の草庵を人に與へて、去るに臨み、窓下に二首の歌を殘せり。『高野山、奥まで人の尋ねずば、長閑に峯の月を見てまし。』

◉平家横暴の黒手、四海を覆ひしとき、世を避けて、高野山に來れる者少からず。此の頃、高野山は、佛徒の信仰を一山に集め得たりしも、南都、北嶺が京

都に亂入し、政權に對抗するが如き態度に出でず。專ら天長地久國家鎭護の祈禱を事として、岫を出るの雲影、閑に山色に映じたるのみ。

◉佐々木高綱、元暦元年に登山し、蓮花谷に、草庵を結びたるが、後に、之を明遍上人に附與し、蓮花三昧院と稱したり。高綱は、親鸞上人の門に入て、了智と號したるが、後ち下山して、信州松本に正行寺を開けり。

◉高綱は宇治川の先陣に、功名を爲したるが、梶原を欺きたるを懺悔し、一念發起したる乎。或は、彼は、是程、多感多情の武士なりしだけに、世相の無常を感得することも、人一倍に深かりしにや。彼が登山したるは、未だ平家滅亡の前に在り。

◉此の頃、法然上人、親鸞上人、も登山して、新別所にみ、念佛修行を事としたり、瀧口も熊谷も、明遍上人も來り、次いで俊乘坊重源も來り、やがて平維盛主從も來り、河内の石河判官は、木曾義仲の將、樋口兼光の爲に、其の城

を追はれて登山し、木工允友時は平重盛の遺骨を奉じて來るあり。聖も武士も、敵も味方も、一蓮託生。高野山に名士の集來せしの盛、此の時に過ぐるはあらず。

◉實に、平家物語、源平盛衰記のサイド、グラスともいふ可きは高野山なりしなり。祇園精舎の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、すべて世相を此の山に映ぜざるはあらず。驕りし平氏、萌え出でし源氏の盛威も、悉く其の半面の哀史を此山に留めずんばあらず。

◉維盛は一家一門と共に、一たび屋島まで落ちしが、末路を悲觀したしりにや、從者阿波守宗親を具して、元暦三年三月十五日登山し、瀧口入道と邂逅相逢ひて、今更の如く、夢幻泡影の世の味氣無きを感じたるらん。

◉瀧口入道は、維盛を伴ひて山中を案内し、緣起を說き、昔は家門主從の禮儀なりしも、今は、菩提の大善智識となりて、維盛を勸めて、心蓮上人を請じ、

受戒せしめ、法名を戒法房と改む。從臣宗親は心蓮房となりぬ。

◉維盛が舊臣瀧口に、高野山に邂逅して佛門に歸すること、平家末路の哀史といふべし。仁智の重盛の子なればにや、維盛は何となく世人に悲しがらる。誠に悲劇の人物なり。然れども彼を女人禁制の山に入らしめては劇をなし難し。則ち淨瑠璃の作者、彼を、花の吉野山に入らしめて、『袖無し』を著せしめて彌助となしたるならずんばあらず。

◉吾輩は想ふに、此の高野山の全盛時に當りて、更に登山させたかりし一大人物あり。源九郎義經これなり。義經をして、吉野山に隱れずして、高野山に隱れしめしならば、此の山の歷史に、一精采を加ふるのみならず、彼の末路も亦た一層の變化と異采を添へしなる可きなり。

其廿二

高野山の附近に出沒せし義經。

第六　濱寺より高野山へ

◉高野山の金剛峰寺に、源義經の請文一通を藏す。阿良川庄安堵に關する請文なり。されば高野山にも義經の片鱗を留むるものなり。而して此の文の終に、源義經と署す。此の源の一字こそは、最初に、範頼と共に、彼が頼朝の怒に觸れし事因なりし。

◉義經と頼朝とは、同じく義朝を父とす。等しく源氏を名乘るに於て、些の不都合あること無し。然れども頼朝の胸中を察すれば、彼は嫡腹の出たり、範頼、義經の如きは、共に氏も無き庶腹より出づ。頼朝と兄弟顏して、源氏を名乘るこそ、奇怪の至なれといふに在るべし。

◉義經、頼朝、不和の原因が、一には異腹の出たるに由るは爭ふ可からざるも、異腹の爭ひは、此の兄弟のみには限らず、古今、類例少からず、然れども頼朝の態度は、殊に冷酷を極め、此の一事に因つても、彼が殘忍酷薄の人物たるを想像するに難からず。

◉文治元年三月、平家滅亡の年十一月、義經、頼朝と隙を生じ、京都を沒落してより、其の行動、影の如く捕捉せらるること十七月、文治三年三月六日、後白河法皇、院宣を金剛峰寺に下して、保元以來、戰死者の冥福を祈らしむると共に、義經の追捕を祈らしめし事あり。此の時、恰も、義經は奥州に下りて、秀衡に身を寄せ、其妻子を伴ひて、衣川館に安著したりし時なり。

◉此の時、院宣を金剛峰寺に降して、義經追捕を祈禱せしめし事、味無きに非ず。此の時、實は、京都、鎌倉ともに、義經の行衞を尋ねあぐみたりし時にして、此に至りて、始めて、院宣を高野山に下し玉ひしを見れば、義經は高野山には關係無しと認められしにや。或は、此の命令は、高野山を探る爲なりしにや。

◉此の院宣の降下は、高野山は義經に因緣無しと認められしなるべし。義經の踪跡を嚴探する十有七月の間、記錄に徵すれば、高野山が、嘗て問題に上りし

ことあらざるなり。

◉義經に關係ありと稱せられたる大寺は、政治的色彩を帶びたるものに非ざるは無し。是、また當然の道理なり。則ち政治上に言へば、鎌倉黨に對する義經黨ならざるは無し。而して高野山は從來、專ら祈禱を事として、未だ政治的色彩を帶びず。

◉義經、遁世の志ありしならば、大物浦より逃げ歸りし後、直ちに、高野山に登りしならずんばあらず。源氏も平氏も、遁世者は、悉く高野山に登りたり。當時、高野山は、亂世に於ける豪傑の捨場なりしなり。

◉彼が、高野山に登りしとせば、維盛主從と會合すべきのみならず。種々の人物と、一山に集まりて、非常の奇觀を呈し、而して此の時、彼は、年尙僅に廿七にして、青年英雄の新發智たるべく、英雄回首、則ち鬪戰勝佛として、一頭地を抽きしなるべし。

◉高野山に登りし義經を、賴朝が如何に處分せしやは、義經登山受戒の時に起る可き、興味ある問題たりしなり。然れども義經には、年壯氣鋭、未だ遁世の志無かりし。

◉高野山は、政治的色彩を帶びず、單に菩提、祈禱を事としたりし故に、義經の盛時に、接觸を保たず。義經、無緣の山に來り隱るゝことを得ず。

◉義經西走の後、十七月間、終に、其の踪跡を知らざりしは、一の奇蹟と謂はずんばあらず。彼が隱るゝの精妙にして、隱形の術を得たるに似るものありし乎。或は、深く、堅く、彼に志を寄する者ありて、秦始皇が焚書令の時に、潛に典籍を隱匿せしが如くに、彼の身を隱屏したりしに因る乎。

◉實は、義經は、京畿の間に出沒して嘗て、一回も、捕手の眼に觸れたること、あらず。影の如くに、京都の附近を去來し、噂は噂を生みたるも、追捕の兵を送る時は、恰も、屋角に憩ひし飛鳥の足跡を追うて行くの感を爲さしめたるな

り。

◉然れども彼が遁逃、伏在の跡を明らかにするに及びては、彼は、安然として、行藏し、決して鼠小僧の如くに潛行せず。風に吹かるゝ高空の鴉の如くにフワフワとして吹かれ行きしに非ずして、跼天蹐地の間にも、英雄の態度を以て、前途の經營を試みつゝ、出沒したりしを見るに足らずんばあらず。

◉彼が、天地、皆、敵なりし間を、美人を携へて出沒したりし事、神速、敏捷にして、胸中尙餘裕ありしを知るべく、其の事、實に、戲曲的たり。最後に京都より、妻子郎黨を伴ひ、數百里の行程を、關東を踰えて、奥州に落ち延びし事、尤も大膽不敵の振舞といふべし。

◉義經西走の翌春、二月、三たび院宣を下して、熊野、金峯山の衆徒及び大和、河內、伊賀、伊勢、紀伊、阿波等の國司に命じて、義經を追捕せしめたるを見れば、彼に對する警戒の區域は、京畿の南半、紀伊三脈を踰え、海を隔てゝ四

國の東部にも及びし也。

◉此の警戒地帶の中に、勿論、高野山は含まれたるも、特に高野山の名を記せず。衆徒に命令しても高野山には及ばず。高野山は、多く警戒せられざりしなり。

◉文治元年十一月三日、義經、禁闕を拜辭して、京都を出で、西走し、六日、大物浦に難船し、臣從、悉く離散し、僅に伊豆右衞門尉、堀彌太郎、武藏坊辨慶及び靜の四人を隨へて、天王寺に宿し、是より全く漂泊の人となる。

◉其の月十七日の雪の夜、吉野の藏王堂の前に捕へられし靜の自白に依れば、義經、天王寺にて彼女と別るゝ時、一兩日、其處にて待つ可きを約し、約日過ぎて迎來らざれば、直に行避すべしと命じぬ。期に至りて、從者、馬を以て迎へ來る。則ち之に乘じて行くに、路程三日にして吉野に入る。彼の山に逗留すること五日にして、再び別離し、其の往く處を知らずと云へり。

◉此の時、義經、例の如く、靜に、再會の期を約せしを疑はず。靜が知らず、逗留の坊の主僧の名をも忘れしと言へるは、彼女が堅貞にして敏慧なればなり。

◉義經は追捕の迫れるを知つて、吉野山を遁れ出で、廿二日、多武峯に入りしに、十字坊、喜んで迎へしも、寺廣からず、衆徒多からざるを以て、惡僧八人をして護衛せしめて十津川に送る。知るべし、義經は、紀和の間を出沒したりしも、高野山に入らず。

其廿三

義經吉野入の奇評。義經の隱形法。高野山と賴朝。

◉男北畠治房は、老健にして奇想に富む人なりといふ。傳聞するところに據れば、彼は、義經の吉野入を評して、義經、吉野の天險に據るに意あるに非ず。修行者、則ち山伏の衣裝を得るが爲なりしと云へりといふ。

◉男北畠の說、太だ奇拔なり。當時、世間、山伏の衣裝の出來合といふもの無

かりしなる可く、則ち義經が山伏に假裝して潛行せんには、先づ此の地方に來りて、其の衣裝を得るの必要ありとなせるは無理ならず。然れども此の說は義經の東走を前提とするもの也。

◉義經、近畿より奧州に東走を企てしは何時頃の決心なりしや。彼は、大物浦を遁れし時より東走の意ありしや。此の點、實は、未だ明らかならず。

◉義經、吉野より多武峯に入り、多武峯より、更に十津川に逃る。男北畠の說に據る時は、彼は、此の間、山伏に假裝したりしか、或は、山伏の衣裝を携へ行きしなるべし。

◉當時の風說に依れば、彼は、翌春三月、伊勢に現はれ、大廟に參拜したりと傳へ、神宮の祭主も彼に心を寄せしと云ひ、夏に至りて、伊勢にては、義經、南都に在りと噂し、京都にては鞍馬に在りと風評せり。

◉此の年六月六日、更に院宣を下して、五畿七道の國司をして、義經を追捕せ

しむ。警戒は全國に廣まりたるなり。義經の名、三位中將良經と紛らはしといふを以て、此の時、改めて義行と云ひ、潛行久しきに渉つて、知れざるを以て、更に改めて義顯と云はしめたるも、眞の義經は、遂に現れ來らず。

◉義經の風説は、山中の反響の如く、音のみ聞えて、姿は見えず、仁和寺石藏の邊に在りといふを以て、追捕すれば、既に逐電して無し。

◉凡そ古今の英雄、脱奔、潛行の神出鬼沒の慨ある者、義經と高杉晉作との如きは無し。其の人物、亦た相似たるところあり。美人を携へて、敵の警戒地帶を往來するも亦た相似たり。

◉此の年の秋、義經、比叡山に在りとの風評あり。山僧、また彼に志を寄せたる者少からず。或は、彼、眞に北嶺に潛在せしなるべし。彼が北嶺に潛在するは、尤も其の處を得たるなり。

◉義經、潛在の間、京都及び近畿に於ける同志と、氣脉を通じたるは疑無し。

而して北嶺の衆徒、彼を尊崇するの志極めて堅き者ありしも事實なり。

◉北嶺に、追捕の兵を容るゝは、事態容易に非ず。土肥實平は、阪本より兵を進めんとせしも、廷議許さず。唯だ北嶺は東西交通の要衝に當るを以て、遠捲して警戒したるのみ。若し、此の時、叡山を攻擊せば、義經、或は衆徒の陣頭に出現せしやも知れず。

◉義經、京都の附近に潛在して、肝膽を疑らし、企畫するところありしも、遂に、志を逞くするを得ざるに至つて、東走して、奥州の秀衡に賴る。東走は、彼が最後の計ならずんばあらず。

◉義經、東走の徑路は如何。固より其の明確なるを得難し。東海道を行くは餘りに放膽なり。北陸道の邊僻なるを擇びしやも知らず。兎も角も、事實は詳にし難し。但だ彼が神速、敏捷、能く劍の刄を渡るが如くにして、數百里の敵地を踏破したりしを想像すべきのみ。

◉義經、東走、北陸道を執りしといふに因つて、『勸進帳』の謠曲あり。潛行は如何にも山伏姿に假裝せしにやと想はる。則ち男北畠の、義經吉野入に對する說は、勸進帳より思ひ付きたる當意即妙に非ずとせんや。

◉吉野に遁れたる者、古來、平家の一黨、源義經、或は南朝方など、數多けれども、嘗て、回復の志を遂げたる者無し。而して吉野に據りし者にして、高野山に、關係を生ぜざりしは、前後、唯だ、義經一人ありしのみ。

◉應仁の亂に於ける一方の立物、畠山義就の如きは、先づ高野山に遁れて、畠山政長の追擊軍と山上に戰ひ、敗れて吉野に奔りたり。多くの者は、吉野より高野に、ひとり義就は高野より吉野に往けり。

◉義就は、寬正四年三月、政長の爲に嶽山城を陷れられ、遁逃して、甲冑を被たる儘にて、高野山に奔り登りて、衆徒の掩護を賴みたり。武裝の儘にて登山したるは、大師開闢以來、未曾有の珍事なり。衆徒等は、定めて目を丸くし

たりしなるべし。

◉衆徒は、惡く、大塔の庭に集まりて、義就の援否問題を討議したるも、議論決せず。其の間に、義就は頓著なく、焦眉の急なれば大門口と不動阪とに、兵を分ちて、追擊軍に對する防禦準備を講じたり。

◉因果は小車の如くに廻る。明應二年四月、政長、戰敗れて、河內正覺寺に自殺せんとするや、其の子尙順をして紀伊に遁れしめ、尙順は圍を衝きて高野山に奔り登り、衆徒に依る。

◉義經の時と雖も、奔つて登山するに差支ある事無し。若し衆徒、一味せば、高野山は天險なり、彼の戰に神智なるを以て、據守するに難からず。但だ彼は、衆徒が干戈に投ぜざるを知りて、登山せざりしにてもあるべし。

◉賴朝に對する義經の反抗は、强ゐられたる反逆心ならずんばあらず。此の事、當時、既に世論あり、這般の心境に立ちて、彼には毫も遁世の心無く、飽くま

で闘戰の志を磨きたるは、騎虎の勢なり。

◉高野山が南朝に一味したる時も、祈禱を凝らすのみにて、干戈をば事とせざりき。大塔宮が吉野より高野に遁れ玉ひしは、高野山史の一大光彩なり。此の時、衆徒、丹精を抽んで、御危難を救ひ奉りしも、干戈を以て援け奉らざりき。

◉元弘三年二月、西六波羅より二階堂道蘊をして、高野山を襲はしめ、滿寺に亂入して、宮の御行方を索めし時、衆徒は、奇計を廻らし、宮をば大塔の天井の梁の間に忍ばせ奉り、老僧等は身命を擲つて、摩利支天隱形法を修し奉る。

◉天佑は、隱形法の上に降り、敵將道蘊は、此の時、大塔を本陣としたるも、眼前の梁上に隱れまします大塔宮を發見すること能はず、手を空しくして退山せり。

◉隱形法の奇蹟、此の如くならしめば、義經も登山するを妨げず。彼は、隱形法を修せずして、京畿の間に出沒し、遂に發見さるゝこと無かりき。然れども

彼は隱形ばかりを以て滿足するものに非ず。必らず現身、樹立せんとするが故に、登山せず。遙々、奥州に東下せるなり。

◉義經登山せず。而して賴朝も亦た登山せず。二位ノ尼は高野を尊信したるも、女人なれば登山するを得ず。熊野詣の歸途、天野宮に詣でゝ歸東す。古今、天下を取りし英雄、高野に登山せざりしは、唯だ賴朝一人のみ。

其廿四

奥の院とウエストミンスター、アッベイ、北邙、琉球の墓、鳥部野。

◉今、吾輩は、一ノ橋に臨んで、覺まず感慨を催し、多くの古人を回憶して、尅を移せり。一ノ橋は、又た大橋とも稱す。大橋を渡れば則ち奥の院、大師廟の在る處、而して此の橋より廟に至るまで約廿町、杉檜、鬱然として枝を交へ、殆ど曦影を睹ず。中に一條の大路あり。路の左右、古今貴賤の墓碣、無數、林立して、樹枝と多きを競へり。

◉吾輩は、未だ英國のウエストミンスタアー、アッベイを見ず。然れども世間、高野山の奥の院を語る者、必らず是を以て彼に對比せざるは無し。或は歐米人、遙かに高野山を聞く者も、此の如く想像しつゝあるならん。事實に於ては、彼は是の比にあらず。彼には此の如く無數の大小墓碣の林立するを見ず。墓といふも甚だ寂寞、而して無數名士の雄魂を集むといふも、實は、我が國の位牌堂に類せずんばあらず。

◉奥の院の墓地は、巨墓、豐碑、實に數へ盡されず。細かに之を視んには、旬日を費すと雖も、足らざるべし。而して是等の墓碑は、必ずしも、悉く死者の遺骸を安置したるには非ずといへども、或は遺骨の一部或は遺髮、或は最愛の遺物を埋め、少くとも墓碑として適切ならずといふもの無し。則ち無數名士の墓場として、奥の院は、世界無比のものたるを失はず。

◉支那の北邙、日本にては鳥部野は、墓場として尤も顯著なるものなり。吾輩、

嘗て、京都に遊び、鳥部野を過ぐ。墓石、累々として地を埋むるは、譬へば、石塊の碌々たる濱邊を過ぎ行くが如し。此の中、名士の魂を瘞むるもの、果して幾干ぞ。其の大多數は、概ね死して朽つる人なり。或は富貴なりしもあらん、其の名は傳はらず。

◉鳥部野を過ぐれば、渺茫たる墓原、多く感興を引くもの無し。唯人をして、蜉蝣に等しきを悲觀せしむるのみ。奥の院は則ち然らず。一墓、一碑、其の名を聞く毎に、人をして感興を起さしむ。或は、其の人を憶ひ、或は其の時代を憶ふ。

◉若し、奥の院に徘徊して、是等の墓碑を主題として、遺憾無く感想を語らしむるを得ば、卽ち我が國史の、古今の變遷に關する、人物、時代、社會の表裏面に關する評論を網羅するを得べし。

◉鳥部野は、例へば雜然たる群集の如くならずんばあらず。北邙も亦勿論、此

の如し。奥の院は則ち大夜會なるべし。此の席上に列するの人物多少の地歩、名聲を有せざるは無し。奥の院は、『一粒撰』なりといふを妨げず。

◉如何なる時代の、如何に壯大なる夜會と雖も、古今の人物を網羅すること無し。唯だ奥の院の墓原のみ古今の人物を集む。魂魄、相知るありせば、定めて、興味ある大集會、大談論を爲しつゝあるならずんばあらず。此の九原、決して寂寞たらず。

◉詩に依つて、北邙を想像すれば、城市、日夕、笙歌の聲に接して、北邙山上一片の烟あり。生の歡樂は死後の哀趣を攪亂しつゝあり。我が國の鳥部野も亦此の如し。僅に鳥部野を出る一歩なれば、則ち歡樂の衢なり。此の如く、墓原は、つねに醉鄉と、肩を聯ねつゝあるに非ずや。

◉吾輩、鳥部野を憶へば則ち那覇の墓原を回想せずんばあらず。那覇は琉球の大都なり。琉球の墓は、悉く小さき堅城なり。巨墓なるの點に於て、東洋に冠

絶す。則ち墓原の壯觀、想ふべし。

◉琉球の鳥部野は、遊廓と春中合はせにして、海岸にあり。萬里海風、涼を吹き來る時、雲鬢の美人、髪を散じ、墓上を徘徊しつゝあるを見る。

◉北邙の詩趣は、到る處、日夕、笙歌の聲、脂粉の氣、幽魂を驚かしつゝあるに非るは無し。奥の院は則ち世界的北邙の、尤も崇嚴にして壯大なるもの。而して大師開闢以來、笙歌を禁じ、女人を禁じたれば、其の幽清にして、森嚴なる、また固より古今、東西に、其の比を見ざるの北邙たりしならずんばあらず。

其廿五

ウエストミンスター、アッベイと賣屋の庫。上田秋成の佛法僧。巴里の屍鋼像と奥の院の大名塔。

◉英國のウエストミンスター、アッベイに於る感興は、アーヴキングの妙文に由つて天下に紹介せらる。アーヴキングの藻思は、譬へば、馬琴の『賣屋の庫』と相似たるもの無くんばあらず。

◉アーヴキングは、親く古英雄の幽魂を集むるの處に往き、魂、髣髴として來り語るが如く、自ら無限の感慨に打たれたるなり。故に、其の文、情趣に富みて、品格もあり。馬琴の『質屋の庫』は、則ち全く空想の虛構に出づ。唯だ彼の脚色の奇は、古人の魂を招きて、其をして、自から滿腹の氣焔を吐かしむるに在り。

◉成敗の迹、渾て夢に似たり、古人の心事、古人自ら知るのみ、或は、後人の忖度の外に出るもの少からざるべし。墓、若し、能く言ふことありせば、奥の院の一夜、千萬の巨墓、豐碑、悉く語りて、一代の史家をして、喫驚せしむるに足るものあらん。

◉上田秋成の佛法僧一篇は、則ち這般の興趣に想到したるもの。此の篇の中に、奥の院に、露宿したる、秀次、木村常陸介等の靈に逢へる夢然と云へる老人は、虛構の人なるべく、或は、彼、一夜、自から奥の院に來りて、恍惚として古人

物の靈と語りしやも知れず。

◉秋成の雨月物語は、白峰の一篇、餘りに有名なるを以て、『佛法僧』は爲に壓せらる。此の二篇は、共に同意匠、想ふに、彼、先づ、白峰に、其の著想を得て、光怪陸離の文を爲せるなり。然れども高野山に關するの文章、巢林子の高野萬年草の外、此の篇を推して出色と爲すべし。

◉馬琴は奥の院を見ず。故に『質屋の庫』あるのみ。若し、彼をして、奥の院に來りて、感興を逞くせしめしならば、其の該博なる智識を披瀝して、定めて豐富なる詮索を爲せる一大篇を留めしなるべし。

◉奥の院に、磊々として密集する大小無數の大名塔は、何等の姓名、文章の一片だも記せず。若し、歐米人より見る時は、此の大名塔は、一の象徴として、深き感興を有するものならずんばあらず。

◉島崎藤村の巴里通信の中に、佛國に於て、人間の遺屍を、其の儘、直ちに銅

像に作るの技術、流行するに至れる事を報ずと聞く。此の法、一大學教授の發明にして、屍體の皮膚に、遍ねく硝酸銀の濃溶液を塗付し、硫化炭素の中に溶かされたる白燐の蒸汽を以て燻ずる時は、皮膚は化學的變化を起し、眞黒に光るべし。

◉此の黒光屍を、更にルウバニ鍍金法に依り、熱電疊助勢、硫酸銅液盤の中に浸し、電流を通ずれば、數時間にして、黒光屍は全く銅化すべし。此の如くにして、更に、數時間を放在すれば、銅層は次第に厚味を加へ、遂に、手足、悉く堅牢、宛然、一箇の好銅像となり畢る。

◉此の屍銅像を、液盤の中より出し、數穴を穿ち、屍體中の瓦斯を放散せしめ、次いで之を烈火の中に投ずれば、像内の屍體、全く灰燼に歸し、美しき銅像を現出するに至るといふ。

◉此の屍銅像は、故人の遺屍を以て、銅の木乃伊を造るものにして、人類が、

木乃伊を創製せし思想の、新發明の發達に伴ひて、非常なる整美、進歩を來たせるものならずんばあらず。畢竟、此の銅の木乃伊は、木乃伊と火葬との合體せるものなり。火葬は、全屍體を燒く。此の銅の木乃伊は、遺屍の外を木乃伊にして、其の内を火葬するものなり。

◉吾輩は、未だ此の法の實施を見ず。其の興趣如何を想像し易からずと雖、これを從來の銅像に比すれば、飽くまで、其の眞を得るものたるは、言を要せず。

◉此の屍銅像法をして、三百年前に發明せられて、日本に輸入せられたりしならば、奥の院の大名塔は、必ずや無數の、威儀堂々たる大名姿の屍銅像を、此の滴翠、淋漓たる杉、檜の林中に發見したりしなるべし。

◉此の妙法は、高祖大師の叡智を以てしても未だ夢想せざりしところなり。當時の古文明に於て、未だ此の奇想無かりしを以て、大師は、彫像に、一層、苦心し玉ひしなるべし。

◉高野山に於ては、大師の入定は示寂に非ず、全然、入定なり、大師は金剛定に入り玉へるなりといひ傳ふ。これを以て、大師入定後、時に、其の姿を現はし玉ふことありとなせり。金剛定といふは、別種の定あるに非ず。大師の入定をいふ。

◉若し、大師、示寂し玉はず、入定せるものとなさば、大師廟の中に、活けるが如き大師ある可き筈なり。然れども、其の眞否を爭はんが爲に、大師廟を開くことある可らず。大師廟は、唯だ、觸れずして、之を崇景すべし。是、大師に敬意を致す所以なり。

◉入定の大師、活けるが如くに、大師廟中に在り、而して無數の、古武人の屍銅像、廟前、奥院に林立したりしと冥想せよ。其の奇觀、冥想するだに、感興を煽ほるに足るもの無くんばあらず。

其廿六

大名塔の壯觀。鎌倉武士の佛修行。

◉奥の院の壯觀は、大名塔に在り。大名塔は則ち、江戸時代の舊大名の供養塔なり。三百大名を、悉く網羅したるに非るも、概ね其の大數を盡したりといふを妨げず。大名武鑑を墓場に展開したるもの、則ち奥の院の大名塔ならずんばあらず。

◉是等の大名塔は、必ずしも大名の遺屍を埋葬したるものに非ず。遺髮、遺骨の一部等なるが多かるべし。或は、單に、其の遺物を埋めて、純乎たる供養塔にして、墓とは云ふ可らざるものも少からざるべし。

◉是等の大名は、一も其の姓字を明記するものあらず。廟は、上杉謙信、秋田の佐竹侯、井伊掃部頭の三あるのみにて、其の他は悉く供養塔にして、同型にして唯だ大少の相違あるのみ。不知案内の旅人にして、此の、墓原を獨行せば

濱を往きて眞砂石を見るが如く、何人の墓なるを辨ず可らず。紋章ありと雖、非常の博識者に非れば、悉く諳知し難し。

◉江戸時代の三百大名のみにあらず、供養塔の中には、戰國の英雄も少からず。明智光秀の塔は、其の遺臣の建るところ。其の人、秀吉を狙ひ、荆軻たらんと期して果さゞりしもの、其の事實を脚色せば、又是れ、高野山に於ける一篇の歴史小説を爲すに足るものあらん。

◉人名塔の中には、鎌倉武士に關するもの少からず。古きは多田滿仲に及ぶ。則ち吾輩は、一概に、稱して大名塔といふと雖も、寧ろ、武家塔といふの當れるやも知れず。

◉鎌倉武士は、多く高野山を崇敬し、此に來りて、前後、出家したる者、非常に多し。實に、王朝末より鎌倉に到るの士人は、佛書を讀み、佛教を聽き、佛に憧憬して、佛者となれり。

◉吾輩は、源平武士が出家得道したるの多きを見て、油然として、ドン、キホーテを憶ふ。ドン、キホーテは、武士に憧憬して、矢も楯も溜らず、書齋を出でゝ、武者修行を爲せり。鎌倉武士は、干戈を擲つて、圓頂の人となれり。ドン、キホーテの憧憬したる武者修行は、既に前世の思潮なり。鎌倉武士が憧憬したる佛も亦た此の如し。

◉ドン、キホーテの武者修行に、突梯滑稽多きが如く、鎌倉武士の佛修行にも、定めて、調子外れの物語ありしならずんばあらず。時代、漠焉として、事實、傳はらず。

◉敦盛の塔は、熊谷蓮生坊の建つるところと傳ふ。若し果して事實なりとせば、直實、出家して蓮生坊となりし時、此の蕾の花の若武者を斬りし昔の無常を觀じて、塔を建てしなる乎。

◉吾輩は、かねて敦盛塔に對して、擅特山の淨瑠璃を回憶す。蓋し作者、此に

來りて、熊谷の建てし敦盛塔を見て、忽ち此の一篇の好脚色を著想したるならずんばあらざるべし。

其廿七

珠數屋小僧の案内振り。一本。二本。人國記と奥ノ院。宮島繪馬堂と大名塔。

◉奥の院の武家塔、英雄塔は、其の姓字を明示せざるを以て、一ノ橋を渡つて大師廟に到るの間、全く、珠數屋の子供の繩張に屬す。彼が、一々、指示、説明するに非ざれば、何人の墓たるを知る可らず。

◉珠數屋の子供は、ホウの木の下駄を引摺りつゝ、吾輩の前に立ち、且指さしつゝ、墓の主を、朗讀するように呼び行く。彼の案内振りは、聲色を動かさずといふも、大業なるべし。平然、澄まして、空、吹く風の如く、聲音、自から、彼の咽喉を流れ出るにも似たり。而して彼の案内振は、且つ、平然、冷然、急々として速やかにして、客の印象すると否とを介意せざるが如く、畢竟、教師

の説明には似ず、寧ろ、小僧が讀經する如くに、獨り、塔の主人の名を、暗誦しつゝ行く也。

◉此の子供は、大名塔を指して、一本と呼ぶ、多くは、大名の姓氏を言はず、概ね藩名を稱ふ。塔を一本といふこと面白し。彼は、輕く手を擧げて、呼び上げ、一塔畢れば、直に次の塔に移る。或は遠く、近く指し、其の、眞に、孰れの塔なるやを、客が未だ辨識せざる中に、早く既に、二三塔を紹介し畢る。客をして、全く、應接、遑あらざらしむ。彼はいふ、『此の三本が薩摩どの』

◉大名塔を指して、一本、大名を殿といふは、昔よりの慣はしなるべし。吾輩は、珠數屋の子供の案内振は、昔も今も變らざるべしと思ふ。女人禁制の古にも珠數屋ばかりは、在りしなればなり。

◉彼等は、國持大名には、國名或は、姓氏を併せて『長州、毛利どの』と喚ぶ。城持大名には、姓氏ばかりをいふもあり。國名、地名を併せいふもあり。『三州、

『岡崎どの』といふが如し。而して其の國名、地名の間に、物主格『の』の一字を、決して挿入すること無し。

◉此子供が下駄音、高く踏み鳴らしつゝ、大名塔の名を呼び上るを聞けば、古英雄の風貌、一々、點呼に應じて、此墓原に出現し來るを覺ゆ。

◉山中の宿坊といふは、即ち此の大名塔の供養に任ずるものなり。舊檀主の塔あり、而して檀士、領民登山の時、其の宿坊に投ず。即ち山中宿坊は、大名の對峙する如くに、地方的に、對峙しつゝありし。今日に於ても、尙此の形勢を、習慣的に把持しつゝあり。

◉宿坊は、大名別、國別に分けられたり。宿坊の大僧、雛僧は、古來、定めて諸國の地方語、人情、風俗、習氣に熟し、彼等が、其等のものを、山上に代表しつゝありしなるべし。換言すれば、古來、高野山上に、活ける人國記ありしなり。

◉抑も、昔の人國記は、北條時賴の著と傳ふれども、其の誤なるは、勿論なり。吾輩の所見を以てすれば、人國記は、江戸時代の初期、或は元祿の初頃に成りしものとなすべし。

◉當時、若し慧眼の操觚者あらしめば、必ずしも全國を遍ねく行脚し盡くして、人國記を書くに及ばず。高野山上に研究するのみにても、優に起稿するを得しならずんばあらず。

◉這般の感興を象徵するものは、則ち、奥の院の大名塔ならずんばあらず、吾輩は奥の院に來り大名塔に對して、四圍の幽邃なる好風景の中に、人國記の趣味を想到す。

◉吾輩の新人國記は、目睹、實査せざるところには、決して筆を執らず。一々、實地研究に本づく。吾輩の所信を以てすれば昔の人國記は、必ずしも悉く實地研究に本づきたりと思はれず。彼、著者が、著想を奥の院に得たりと想像する

は、強ち空想に非るべし。

◉奥の院の大名塔に對すれば、油然として、宮島の繪馬堂を想起せずんばあらず。此の二者は、或一部に於て、共通の意義を有するものなり。

◉繪馬堂は、生者の事業を展列するものなれども、生者は逝きて悉く故人となるを以て、其の結果に於ては、死者の展覽會たらずんばあらず。奥の院は遺骸を、繪馬堂は遺業を、二者ともに、故人の墓碑を營めるものといふべし。

◉奥の院は象徴的なれども、宮島の繪馬堂は、表現的なり、繪馬堂に、繪馬の書畫を奉納する者は、生前、其の製作を天下に示し、名字を廣告せんとするのみに非ず、身後に不朽の記念塔を造るの目的を以てする者多し。這般の意味に於て、繪馬は、故人の生壙なり。則ち繪馬は墓塔ならずんばあらざるなり。

◉此の二者の相違は、宮島は交通の衝路に當り、高野山は交通の太だ不便なるに在り。登山する者は、特に、有志者ばかり集來すべし。然れども新文明の力

は、今に於ては、二者を打して、稍、相接近せしむ。高野山も亦宮島と同じく、信仰の外、觀光の目的地となれるなり。

◉奥の院に來れば明かに墓塔を見るのみ。宮島には墓を見ず、繪馬を見る。然れども、繪馬堂は、一の奥の院たりといふを妨げず。

其廿八

大名塔と私人の墓。五輪塔に暗示されたる意味。墓と威力誇示。

◉奥の院には、大名塔の外、一私人の墓少からず。市井の人、或は、他宗の人たるを問はず、勿論、男女を擇ばず。八宗兼學にして、何人と雖も、身後、此に來つて成佛するを得可く、靈界に於て、極めて自由の精神を發揮せるは、奥の院なり。

◉芭蕉塚、其角塚等の如く、俳人の句碑少からず。是等は句碑たると共に、供

養塔たり。供養塔たりとは雖も、句碑としては、宮島の繪馬と性質を同じくするものたらずんばあらず。

◉芭蕉塚は、表に『父母の、しきりに戀し、雉子の聲』の一句を題し、裏に、雪中菴藝太の名を以て、其の由來を記す。此の句、石童丸を躍出せしめて、頗る感興あり。吾輩も亦た故鄉の老母を憶ふて、頻りに暗涙を催ふす。

◉私人の墓には、皆姓字を記す。是等、無名の人の墓は、珠數屋の子供に諳誦せらるゝこと無きを以て、名字を刻せざれば、子孫と雖も、辨知し難し。

◉すべて奥の院に墓碑を營む者は、永世塔の意ならざるは無し。鎌倉の昔は知らず。江戸時代となりては、諸大名、永世供養の爲に、此に、大名塔を建つ、御家改易の難ありとも、奥の院は『守護不入』の地、改易の難あること無し。假令。家祭斷絶するも、靈魂、千歳、此に廟食するを得る。

◉政治上の黑手は、奥の院に及ぶを得ず。死者を、政治上の變遷より救ひて、

永世に安泰ならしむるは、大師の餘澤なり。此の意味に於て、高野山は天下の總菩提所にして、冥福祈護の大本山たらずんばあらず。

◉生時に、地上に威權ある者も死後に來つて、悉く大師の膝前に跪づきつゝあり。奥の院の大名塔を見よ。

◉奥の院の大名塔に見れば、勝利者も、敗北者も、共に千歳に廟食しつゝあり。武田信玄、勝頼もあり。不孝者をも、死後には、大師は成佛せさせ玉ふなり。

◉等しく五輪塔といふと雖、大小同じからず。其の所謂小者と雖も、個人の爲には巨墓たるを失はず。概ね大者多し。殊に、其の大者に至つては、堂々として、人を威壓するの觀あり。

◉奥の院の無數の五輪塔に現示されたる意味を讀み行くも、感興淺からず。本多平八郎の墓は甚だ小、而して其の小なる所に味あり。吾輩は、其の小墓なるを以て、何となく、平八郎をゆかしく思ふの情無き能はず。

◉大諸侯、必ずしも巨墓を建るとは定まらず。小諸侯にも巨墓なるは珍らしからず。畢竟、五輪塔の大小は、必ずしも其の祿高に正比例せず。然れども、概して大諸侯には巨墓なるが多し。

◉奥の院の最大の五輪塔は駿河大納言、實に、崇嚴の感、人に迫る。高野山の一壯觀たらずんばあらず。能くも〳〵是程の大石を、不動阪を越え、運び來りしと、驚かるゝほどなり。駿河大納言は、或は第三代將軍たる可かりし運命の神に挑發せられし人。不幸にして將軍たるを得ざりしとはいへ、當時、其の威勢の旺盛なりしは、身後の巨墓に象徴せられつゝあり。

◉駿河大納言に次ぐは安藝の淺野、第三番は百萬石の加賀。此の三は特に艶稱せらる。是等に次ぐは薩長なるべし。

◉高野山の山上には森林のみ、石材無し。此の無數の石塔は、すべて山下より推し上ぼせ來る。今日にては索道の便ありとはいへ、これを、馬背、人脚を協

力して運上せしの勞、想像するに餘あり。

◉奥の院は、『威力誇示の好舞臺』たらずんばあらず。大阪城の城門の巨石が、一の威力誇示たるを得ると同じく、大名塔の巨墓は、全く、威力誇示なり。大諸侯に、概して巨墓多きは、則ち此の理に本づく。

◉大名塔以外、私人の墓、頗る美なるもの少からず。殊に、近年の墓に多し。松本重太郎の墓の如きは其の顯著なるものなり。近年、東京の高田慎藏、年々登山して、山上、山下に『威力誇示』を發揮しつゝあり。信仰と廣告と兼ね至るものなるべし。高田の墓は、必らず將來の、奥の院に、一頭地を抜くならん。

◉身後に、奥の院に威力を誇示せんとする者は、須らく生前に於て、其の經營に著手せずんばある可らず。侯大隈は威力誇示を好める人なり。宜しく奥の院に壯大なる生壙を、豫め築かん事を要す。假令、彼、百五十歳を期すとも、今より形勝の地を卜定するを妨げず。

◉先年、侯大隈の登山は、其の仰々しき行列、定めて一山を驚かしたるべし。然れども團體登山、つねに多きが故に、隨伴者の多數ぐらゐの事は、甚だしく人を驚かすに足らず。

其廿九

中ノ橋。汗かき地藏。棺掛櫻。姿見の井。

◉奥ノ院の一ノ橋より玉川橋に到るの中途に、中ノ橋あり。此の小流、別に、何等の傳說を留めず。中ノ橋は自ら一の名所たり。棺掛櫻、汗かき地藏、姿見の井戸は、橋畔に於ける靈蹟なり。

◉一ノ橋より玉川に到るの間は半里に餘り、全く北邙にして、若し中間に此の中ノ橋を架する無かりせば、如何に、感興に富める奥ノ院も、聊か倦怠を起さしむる無きを保せず。中ノ橋は則ち奥ノ院の單調を破る中幕なり。

◉吾輩は、珠數屋の子供及び雛僧と共に、汗かき地藏を一拜して、徐ろに其の前に憩ひつゝ、感興に昂騰したる吾が胸を鎭め、地藏尊を諦視すれば、油紙の古びて黑光を帶びたらんやうに潤ひて輝けるが、如何にも、膏汗の浸み出たらんが如くなり。汗かき地藏の名、空しからず。

◉汗かき地藏は、棺掛櫻の東、一間四面の小祠堂の中に安置す。毎朝、玉の如き汗を流し玉ふ故に、此の名あり。朝々、尊顏の汗を拭へども、翌朝、流汗、玉の如し。傳說には、此の地藏尊、夜々、人知れずこそ、勞働し玉ひて汗を流し玉ふなりといふ。

◉此の地藏尊は、何事に、かくは勞し玉ふにや。定めて慈善、救世の爲なるべきは言を俟たず。兎に角、汗かき地藏の一語は、精力絕倫の大師を表現するものならずんばあらず。

◉奥ノ院の名勝、靈蹟、概ね大師を象徵するに非ざるは無し。大師の一生を繪解するものは、奥ノ院たりといふを妨げず。

◉棺掛櫻は、嵯峨天皇の御棺の掛り玉ひしといふに本づく。天皇崩御の後、遺詔に隨ひ、御棺を、嵯峨野の木上に置き奉る。暫らくして、御棺、自ら飛んで雲漢に入り、天童、雲中に奉侍して、奥の院に送り、此の櫻樹の上に掛け奉る。大師、乃ち出定して、荼毘し奉り、御骨を西峰に納め奉る。

◉棺掛櫻の奇事は、即ち嵯峨天皇と大師との關係を表現するものなり。天皇、大師を尊信し玉ひし事、非常にして、大師は、之に因つて、稀世の大業を成就するを得たり、君臣信敬の篤き、棺掛櫻の奇蹟を出現せしむるに到る。

◉聖人には奇蹟多し。奇蹟無ければ聖人とするに足らず。高野山に來りて見れば、大師の奇蹟に富める事、驚くべし。聖書に傳へたる基督の奇蹟といふと雖も、大師の前には顏色無し。古今、世界、奇蹟に富めること、大師の如きは、他に有らざるなり。

◉死後の基督は、一たび復活したるに留まる。大師は則ち金剛定に入りて未だ

示寂せずと傳ふ。而して千年の久しきに渉り、時々、出定の奇蹟あり。これを基督的に解釋すれば、大師は幾回となく復活するものにして、固より金剛定に在るを以て、將來と雖も、出定し來るやも知れず。

◉大師は三鈷松の奇蹟を、自ら敢てしたるのみならず、其の大檀主をして、また棺掛櫻の奇蹟を垂れしむ。基督生前の奇蹟、此の如く雄大なるもの無し。

◉汗かき地藏の東側に在る一の井戸を『姿見の井』といふ。靈水なりと傳ふ。參拜者は、皆、此の井に臨みて、顏を照らすを以て、奥ノ院の一名所たり。顏を照らして、影、水に映ぜざる時は三年の中に生命危うしとかいふ。

◉『姿見の井』は小さくして淺し。天晴れ、水澄める時、顏を照して影を鮮せざるの理無し。若し、此の如くして影映ぜざりせば、其人、固より壽無きなり、年々、登山しつゝある高田愼藏はつねに此の水に臨んで顏を照しつゝありや。

◉吾輩は、子供、雛僧と三人にて、顏を照らすに、三つの顏、鮮やかに井水に

映じて、眉目、悉く明らかなり。吾黨、三年の中、息炎、疑無しと謂つて、三人、齊しく笑ふ。

◉『姿見の井』は諸處に在り。必ずしも奥院の特有にては非ず。古英雄の照鬚井といふは世間に珍しからず。吾輩も亦た鄕里に、長門深川の太寧寺に、大内義隆の照鬚井ある事を憶起す。義隆遁走して、此に來り、計らず井に臨んで、影、映ぜざりしを以て、命の窮するを識ると傳ふ。

◉水鏡の一語は、自然の事實なり。流水、能く顏を照らすも、流水の波立つは、止水の靜かなるに若かず。『姿見の井』は即ち恰好なる水鏡なり。

◉大師は、此の邊を逍遙する時に、つねに此の井に、顏を照し玉ひしにや。此の井、靈水たること太だ古くより知らる。元と稱して藥井といふ。延喜十一年、大師號を賜りし時、勅使、少納言惟助、惡瘡を病み、大師に祈りしに、夢に、此の靈水を飲むべしと、告げ玉ひしかば、歡んで飲みしに、速に平癒したりと

傳ふ。

◉水鏡は能く眞を顯はす。魔性の鬼女、假令、巧に人眼を晦ますものと雖も、水鏡に照らせば、其の眞面目、實に隱す能はず。況んや、此の井、靈水なるに於てをや。

◉吾輩の所見を以てすれば、大師の入定は、其の定命を、豫め識りての事なりと斷ぜんと欲するなり。大師の如き千古の靈覺、其の天命、享壽、固より心算明らかなるべし。然れども大師は何等の事實に依つて、自から其の定命を確知し玉ひしやは詳かならず。或は、大師も、此の井に臨んで、影の映らざりし事も有りしにや。

◉奥院に來る人、曇天には、此の井に臨んで顏を照らすこと莫れ、澹雲微雨に、顏、井に映ぜざりせば、却つて自ら其の壽を縮むることあらん。青天白日、則ち人間の顏が、澄水に映ず可き事受合なり。

◉延喜の時、靈水たる事、既に知らるとせば、大師も亦た顏を照し玉ひしを想ふべし。千年の月は、千年の人を照らし來る。此の水、亦た嘗て、大師を照らし來る。千年の後、此の井に臨む者、誰か感慨無きを得ん。

◉然りと雖も、此の井に臨んで、顏を照して、三年の中、死せずとせば、則ち此の井や、人に、三年間の生命保險を爲すものならずんばあらず。大師廟に謁する者、須らく、此の井に、顏を映じて、大師の功德に浴せよ。

◉吾輩は想ふに、侯大隈の如き、百廿五歲の壽を期しつゝある者、當さに三年毎に、登山して、此の井に、顏を照らして、其の生命を保險せずんばある可らず。

其三十

蛇柳。崇源院と南龍公との好對照。島津の吊魂碑。宮崎縣の大招魂碑。

◉蛇柳は奥ノ院の名木なり。珠數屋の子供は、指さして、彼の枯柳、邪見の人の

目には、柳條、悉く蛇と見ゆと、說明す。吾輩の眼には明かに、尋常の老柳と見えたれば、吾輩は邪見の人に非ず。

◉『姿見の井戸』に臨んで、命數尙三年を保つを確知し、蛇柳に對して、邪見の人に非ざるを自信するを得る。究竟、奥ノ院は、人に安心立命を與ふるの大道場ならずんばあらず。古來、此の如くして、登山して、安心立命を得たる者幾千萬人ぞや。

◉蛇柳は、異常の珍木にも、大木にも非ず。然れども稍、老幹にして、枯條、骨の如し。杉、檜の喬木の間に介在して、一異彩たるを失はず。蛇柳の名、或は石童丸の小說に因緣するらしく見ゆ。蛇柳といへば、怨念の纏へるものなるを思ふ。吾輩を以て見れば、蛇柳の名、由來、太だ古さやも知れず。然れども蛇柳の宿緣を確かめたるは、快正誅殺の慘事なるべし。

◉豐臣、德川二氏の時、木食上人に次で、出現したる名僧を、蓮花三昧院の賴

慶とす。時に、遍照光院の快正は、賴慶を疑ひ、縛して谷の獄に繫ぎしに、事、駿府に聞え、家康、乃ち召して決斷し、快正の非理なる事、判明し、家康大に怒り、快正を高手小手に縛して賴慶に與ふ。

◉當時、御朱印の文に曰く、『今度有二無智之惡僧一、智者懸レ繩候儀、前代未聞、沙汰限也。向後爲二佛法隆興一、彼惡僧、於二山中一如二古法一可レ被レ致二成敗一事』と。

かくして慶長十三年、八月八日、快正は高野山を引迴はされ、蛇柳の下に於て誅殺せられたるなり。

◉蛇柳の下に於ける、快正の誅殺が、御朱印文にいへる如くに、果して古法の如しとせば、山上に、古來、人を殺さゞりしに非ず。刑殺の法、初より設けられ、而して蛇柳は則ち高野山の刑場たりしならずんばあらず。此の如く解釋し來れば、蛇柳の名、由來するところ、また自ら首肯せらるべし。

◉古來、山上に刑戮の法ありしとせば、秀吉が、秀次を金剛峯寺に切腹せしめ

たる事、強ち未曾有の非法と言ふ可らざるのみならず。之を大師廟前の蛇柳に誅殺するに比すれば、寛大にして、自ら武士道にも合し、且つ、大師を尊敬するの意も含まれたり。

◉家康が、快正を縛して賴慶に與ふるといふ事、甚だ大人氣無し。大英雄の爲す可き事に非ず。流石の大御所も、老來、氣短かくなりて、肝癪玉の破裂したるにやあらん。而して賴慶が唯々諾々として、快正を受取り、誅殺したるも、名僧らしからず。此の英雄、此の名僧、此の一事は、共に失敗なり。

◉抑も家康は、秀吉が秀次を殺したるの前例を思ひ、快正を殺すにや。かくして彼は覇者の威力を示したるにや。大御所、眞に寛仁大度の英雄なりせば、須らく快正を放逐すべきなり。特に、之を大師廟前の靈場に、物々しく誅殺せしむるに及ばず。

◉一山の役僧を如何なる事情ありしにもせよ、大師廟前に刑戮するは、此の靈

場を汚すものにして、大師の冥威を憚らざるの非行たるを失はず。然れども高野山に、多く蛇柳に於ける快正誅戮を喧傳せざるは、何ぞや。當時、關ヶ原戰後八年、家康の威、海内に加はる。續いて江戸幕府三百年、此の如くして、此の慘劇、空しく蛇柳の名の下に埋沒されたるに非ずや。

◉奥ノ院に、天陰もり、雨濕ひて、蛇柳の枝條、悉く青蛇と見ゆるは、快正の怨鬼、出沒するにや、或は、快正以前、刑殺鬼の靈か、抑も、快正等の怨鬼、既に、年々、大師廟前、『佛法僧』鳥の啼聲に成佛し畢れる乎。

◉奥ノ院の巨墓の中、好箇の對照を爲すものは、崇源院と紀州の南龍公となり。崇源院は秀忠夫人、駿河大納言の生母。墓は駿河大納言の建るところ。前者は高さ約三丈ありて、南龍公のは甚だ小さし、其の遺命に本づくといふ。墓碑は高くして、人物は小さし。此の大小二墓は、駿河大納言と南龍公とを象徵するものなり。

◉奥の院の三墓碑ともいふ可きは、大秦景教流行中國碑と、木食上人の墓と、朝鮮役吊魂の碑となり。木食上人は高野山中興の恩人、秀吉の知遇を得て、山勢を恢興す。其の事、今、玆に詳論するの暇無し。彼は、戰國の一奇僧。而して其の墓碑、甚だ小にして雅、如何に奇僧の生涯を象徵す。吾輩は、木食上人の名、高野山に適さはしきを喜ぶ。

◉景教流行碑は元支那の古碑、唐の德宗の時に建つる所、景教は耶蘇教の一派ネストル教にして、シリヤのネストルの創唱せしところ、此の碑、久しく世に佚し、明末に至り發見せらる。英國人、これを奥ノ院に建るは、高野山の性質を、して、益々、世界的ならしめたる所以。此の碑、原碑より小さしと雖も、尙其の面目を見るべし。

◉高野山は八宗兼學といふに留まらず。景教碑を見るに至れるは愉快ならずや。宇宙神靈碑といふものも建てられて在り。乍併、這般の現象は、大師、博大

の精神に副ふ所以たらずんばあらず。

◉朝鮮役弔魂碑は、奥ノ院の名物にして、一大精彩たらずんばあらず。此の碑、島津義弘、忠恒父子、慶長四年六月所建、吾輩、かねて義弘を推して、武士道の權化と爲し、彼を崇敬するの志、甚だ厚し。此の碑は、啻に、彼の人物を偉大ならしむるのみならず、實に、日本の民族精神の表現として、世界に誇示す可きものなるべし。

◉碑文の中に、爲二高麗國在陣之間、敵味方関死軍兵、皆令レ入二佛道一也と記す。敵味方の三字、如何に美しきよ、如何に雄々しさよ、白皙の人は、赤十字を誇榮す。然れども三百年前、日本武士、既に赤十字の精神あり。朝鮮役弔魂碑を見よ。

◉聞く、宮崎縣、兒湯郡川南村多賀小學校の域内に、天正十三年高城々主山田有信の建立せし、高一丈の招魂碑あり。鄉人或は此の招魂碑を以て、義弘の弔魂碑、以前、既に先鞭を著けしものと爲す。

◉此の招魂碑は、表面に、謹奉二訓誦二大乘妙典一千部一、爲二戰亡各靈一と記す。此の碑、或は敵味方の爲に供養せしものなるやも知れず。然れども、敵味方の意味を明記せず。則ち敵味方の爲にするの弔魂碑は。義弘を以て嚆矢とせざる能はず。

◉然りと雖も、此の招魂碑も亦薩摩武士の手に成ること、太だ感興あり。招魂碑の精神、一歩を進めて、朝鮮役弔魂碑となれる乎。或は、戰地の際、日本武士道の發揮、啻に此の一二の碑に留まらず。遍ねく諸國に求めなば、更に、宮崎縣の招魂碑に類するものを發見すべき乎。

◉兎に角此の如く雄大、博愛の大精神、日本武士の固有するところといふと雖も義弘、此碑を奥ノ院に建るは、彼が、大師崇信の厚きに依る乎。抑も、大師の英靈の力、自から招致し玉ふなる乎。

◉吾輩は、玉川に臨み、御廟橋の上に立ちて、大師の奇蹟を思ひ、水向地藏に水を濺ぎ、護摩堂に、大師像を拜し、燈籠堂に、燈明を捧げ、やがて大師の廟前に至る。

◉吾輩、大師廟前に立ちて感慨無量なり、低徊して去る能はず。大師の英靈、在すが如く、吾輩も亦た藻思湧くこと泉の如し。

第七　大師の靈廟の前にて

其一

此の一章は、高野山登拜の時、奥ノ院、靈廟の前にて、感想を饌うせしを、當時、行程匆忙、執筆に暇あらざりしを以て、遂に、今日、北游、清閑を得て起草するに至れるものなり。

佐渡外海府、高千村の海岸に於て、雄風に、滔天の波濤を望みつゝ稿す。健堂生

◉吾輩、今、佐渡の外海府、危礁亂立處の一樓に在り。外海府は此島の西北岸、地甚だ僻遠にして、古來、其の奇勝を知る者少し。文人墨客と雖も、來游すること極めて稀なり。此に來り、筆を執り、文を草する者、或は、吾輩を以て嚆矢と爲すやも知れず。

◉離亭、八疊の一室の中、海を背にして、無我無念、以て斯筆を驅りつゝあれば

鞳鞳たる風濤の響、吾後を擁し、蒼茫たる萬里の波浪、乾坤を白盡し、吾輩の爲に後援を爲しつゝあるに似たらずんばあらず。昨日、吾輩、孤舟に駕して、相川より此地に來りし時、波平にして鏡面の如く、濤聲、海色の、吾輩を刺激するもの無かりし。則ち海伯、夜、風を呼び波を起して、以て、吾が文章の氣を鼓吹しつゝあるなるべし。

◉吾輩、筆陣の間に馳騁すること十有二年にして、初めて佐渡に到る。佐渡は古、流人の國、都人來らず、地の僻、人の少、想像するに餘りあり。蓋し天下を周游すること大師の如きも亦た茲に足跡を留めず。此の島、大師の遺蹟と稱するもの往々にして少からずと雖、實は、大師、嘗て、佐渡に來らず。

◉風勢、ます〳〵濤聲を鼓盪し、一樓、爲に震搖す。蓋し澎湃たる濤聲は、世人、其の喧囂に過ぐるを言ふ。然れども絶海の孤島、風勢と濤聲とに非れば、俗塵を洗ひ、人の心神を清純ならしむるに足らず。且つそれ、其の初、稍、喧

囂なるものも、聞くこと久しければ、毫も其の喧囂を覺えず、久しくして却つて岑寂、澄靜なるを覺え、心地清純にして、吾が心身ともに勇往の氣、充實するを覺えずんばあらず。

◉大自然が人心を純化し、沈靜せしめ、鼓舞作興せしむるもの、大海の波濤を第一とすべし。大師、壯年時、土佐の室戸崎に坐禪するは、海濤に對して冥想したるなり。當年、彼、若し外海府の奇景、尤も奇絶處に至りしとせば、巖頭或は彼の坐禪に適し、彼の杖を留むるに足るものありしなるべし。

其二

◉天下到處に新四十八靈場あり。佐渡にも亦た有り。吾輩、島を巡游するに、處々、遍路者の群に邂逅することあり。遍路者の宿を標榜する者もあり。島の人、互に遍路を爲し、偏ねく靈場を尋ねて島中を巡歷するを常とす。

◉大師、嘗て佐渡に來らず、彼の靈場ある可き無し。事實に於ては、是等の靈場といふものは。大師の靈を招く處たらずんばあらざるべし。

◉外海府に奇勝、膳棚岩あり。奇巖、海中に峙ち、譬へば一大膳棚の如きあり。傳説に、大師此の巖頭に坐禪し、留宿すること事久しく、任那の風、靺鞨の雨亦た彼の禪機を啓發す、巖側、悉く、當年、彼が食器の痕跡を留むといへり。

◉高野山中には、彼が足跡を印すと傳説する石あり。足跡石、尙ほ奇とするに足る、況んや膳棚岩に於てをや。

◉世智辛らき世の中に、如何に田舍なりとはいへ、所縁無き他人を、何等、所由無くして留宿せしむ可らず。唯だ遍路者ばかりは、安然として、留宿せしめらるゝの因縁を有す。大師の靈場を巡拜するの一事が、此の特權を寄與するものなり。

◉遍路者の中には、教育少き善男善女が多し。高等教育を受けたる者は極めて

稀なり。吾輩は、教育ある紳士も、時に、遍路を爲すべしと主張する者なり。

◉遍路者は遍路に依つて救はるゝものなり。中には漫然として信仰的旅行を爲す者も少きに非るべし。然れども生死の苦境に迷ひ、煩悶の衢に彷徨する者、遍路を爲すに非ずんば、此の苦境を脱離する事難し。

◉遍路は以て、深刻なる悲哀を慰むるを得べし。悟道を得んとする者は、「自然の懷」に就くを最善とす。是即ち永遠の感を涵養し、生死の迷を離るゝの途なり。大師の靈、遍路を導いて「自然の懷」に就かしむる者なり。

◉凡そ開悟の法、讀書、冥想もあり。然れども實踐に過ぐるもの無し。且つ下根の人、實踐に非れば救はるゝこと難し。大師の靈は、遍路に依つて、適切に下根の人を救ひつゝあるなり。上根の人と雖、もし遍路を爲さば、其の得るところ、慰安するところは、想像の外にあるべし。

◉人を救ふは、手を以てすることあり、舌を以てすることあり。財に因つて救

はるべく、靈に因つて救はるべし。手と舌と財と、皆、救ふ能はざるもの、唯だ靈、能く之を救ふ。大師は、靈を以て人を救ふ者なり。且つそれ最澄や、法然や、親鸞や、日蓮や、其の人を救ふの門戸限あり、大師は四方の門を開いて、偏ねく八宗の人を救はんと期する者なり。

◉吾輩も凡夫たるを免れず、自ら生死の境に煩悶するのみならず、而して死者を悲しみ、生者を慕つかしみ、現世に執著して、未だ永刼の大道に立つこと能はず。半夜、時に、冥想して此に及ぶ時は、胸を拊つて眠る能はざる事あり。或は路上に、遍路者に逢著する時、其の身世、深刻なる悲痛を帶ぶる者なるやを想像して暗涙を催うすこともあり。或は自ら筆を抛ち、世を抛ち、一介の遍路となり、到處、花に涙を濺ぎ、鳥にも別を惜しみて、以て逝ける父の爲、兄弟の爲、知友の爲、悲しみ度き儘に悲しみ、泣き度き儘に泣き、菩提三昧に、斯世を終らんと思ふ事無きに非ず。

◉菩提三昧といふは、則ち自己の悟道三昧ならずんばあらず。譬へば死者の冥福を祈る爲の讀經は、悉く生者に說くの言たるが如し。

◉吾輩、父、既に沒して、今、恰も十三回忌辰に近く、母も亦た漸く老ゐんとす。大師の老母を高野山下に迎へて、孝養を盡せるの一事を思ひても、深く彼に感發せずんばあらず。彼は靈を以て後世を濟ふ。孝の一事のみにても吾輩を救ふ。

◉高野山の足跡石は、彼が山下の慈尊院に、老母を、朝夕、省養する爲に磨滅したるものなりと傳說す。吾輩、今年春より毎月、東京より故鄕に向つて三百里、母を歸省す。願くは、母、壽康、限無くして、東海道の鐵路、吾輩の乘れる汽車の爲に磨滅するに到らん事を。

◉吾輩は、大師の靈に感謝す。大師は吾輩を救はんとは思はざりしなるべし。然れども。彼の靈は、髣髴として、今、吾が眼前に在り。

◉經世濟民といふと雖、手を以てする者は、一時に留まる。政治上の事、多くは此の如し。靈を以てする者は、恩澤、永劫に盡きず。大師の如きは救世の大なる者なり。

◉吾が卓上の磁石、吾が身上に向つて、正しく南北を指す。吾輩、まさに、北より南に向つて筆を驅りつゝあり。筆尖、高野山に對するなるへし。

◉時に筆を措いて、海濱に立てば、捲き來る波浪、何物をも洗ひ去らんとす。吾輩、此の筆を執るは現實なり、極めて眞面目なる事實なり。然れども他年、此の事實は、恐らくは海岸の石礫と同じく、全然、磨滅されて、素姓も、名も無き石塊となりて横はるに非る乎。此の事實は夢に非るが故に、消え去ることなし。夢も亦た事實なり。事實と雖、沒了せらるれば、忘れられたる夢に異ならず。

◉古來、佐渡に來りし者幾人。佐渡人、果して其の幾人を印象するや。大師、

生前、實に此土に來らず。而して到處に足跡ありと稱す。蓋し大師、眼に、佐渡を見ざりしと雖、彼の靈、天地に磅礴す。今、北海の波濤にも照臨しつゝあるなるべし。

其三

◉吾輩、歷史を專攻す、古來、史學者の傳ふるところを見れば、聰明睿智、大師の如きは、日本人には得易らず。若し、啻に聰明睿智を以てすれば、大師は古今に匹儔を得難かるべし。豈、日本人のみならんや、海外の歷史と雖、彼の匹儔を得ること稀なり。

◉今世、能率の議論、細微を穿り、若し、大師の聰明睿智を以て見れば、能率は殆んど問題に非ず、彼の事を考ふれば、能率を論ずるは、餘りに馬鹿々々し。

◉凡そ精力絕倫といふも、精力に限あり。大師の事蹟を考ふるに、其の精力、

殆んど測る可らざるの慨あり。シーザー、ナポレオン及び秀吉等の外、東西の歴史に於て、殆んど其の匹儔を見ず。

◉「八宗兼學」の一語は、彼の才藝及び趣味の廣博なるを表現す。あらゆる才藝趣味に於ける彼の能率の高大なるは、感嘆に値す。

◉密教の教旨を、初めて系統的に説明したる者は彼なり。然れども佛教に於ける彼の造詣の深きは、彼の本領にして、彼に於ては、寧ろ當然の事と思ひしならん。彼の才藝は、彼の餘伎に屬す。而して其等の餘伎は、悉く彼の本領を修飾するに足りし。

◉彼の才藝、若し書道の一事を以てするも、彼は日本人としては、古今に匹敵を見ず。これを支那に比するも、固より第一流者なり。これ程の手腕を有する彼は、假令、高僧たらざりしとも、書家として千古に不朽なるべし。其の餘、繪畫、彫塑に到つても、兎角の議論あるに係らず、彼が造詣の深かりしは否定

す可らず。

◉彼は文人としても傳ふべし。彼の詩は僧臭を帶ぶ。彼の能率を以てすと雖、萬能なるを得ざるを見るべし。文章は、殆んど著述等身の慨無くんばあらず。今の活字を以てすと雖、尚ほ一尺の厚に達す。昔の木版ならしめば、勿論、等身以上なるべし。其の文は、駢驪體に近く、文章の伎は、書道の俊爽なるには及ばず。然れども文辭暢達、事理明晰、當代の文章家たるを失はず。

◉「天は二物を與へず」といふは格言なり。但し彼ばかりは、此の格言を破壞せる者なるべし。彼は藝術的に高能にして、併せて數理的に高能なり。彼は思索家たり、兼ねて技術家たり、殊に政治家として大なる技能を有す。彼の才、彼の能率適くとして可ならざるは無し。矛は以て盾と爲す可らず、盾は以て矛と爲す可らず。然れども彼の天賦は、矛たると同時に盾たるを得るものなり。是豈、驚嘆す可き事實に非ずや。

◉天は、恐らくは「能率の標本を示すべく、此土に、彼を降誕せしめたるに非ずや。若し彼に不完全なるものありしとせば、其の短壽なりし一事のみなりとせん。

◉彼は六十二歳を以て逝く。天折とはいふ可らず、然れども決して長命に非ず。古來、釋尊の外、世界的大天才にして八十の長壽を得たる者無し。シイザーは暫らく除く。ナポレオンは六十に達せず、若し彼をセント、ヘレナに流竄せざりせば、六十に達せしやも知れず。秀吉は僅に六十。「軌道を逸したる明星」と謳はれしアラゴー（Arago）も亦た長壽を得ざりし。孔子も亦た然り。

◉釋尊の八十は例外とすべく、およそ世界の大天才と稱せらるゝ者、概ね六十才前後の壽を保つに過ぎずとせば、能率及び精力の發揮と壽命との關係を考究するに於て、六十歳は、略ぼ其の標準とすべきを知る。其以上は長命にして其以下は短命とすべし。これに依つて見れば、大師は短命にてはあらざりし。

◉精力は油の如く、能率の表現は、油の燃燒の如く、如何に大精力、大天才にもせよ、萬斛の油の燃えて盡きざる無きが如く、千尺の喬木も燒けて倒れざる無きが如くに、燃燒の盡くるところ、則ち壽の盡くるところなる乎。

其四

◉大師の裔孫無きは、却つて人をして讃嘆の念を強めしむ。譬へば大なる慧星の消えしが如く、大なるミレイジの消えしが如くに。

◉ナポレオンの晩年に生れし不肖の子あるを聞く。秀頼無かりせば、秀吉は、頗る詩的なりし。英雄は、一のミレイジたらずんばあらず。裔孫無きこそ可かるべし。

◉吾輩、一たび泰山に登り、曲阜に往き、孔子廟を吊せんことを願ふ。曲阜には孔子の一族、頗る繁榮せるを聞く。孔子の後、孔氏に天才無し。凡才の繁榮

を見るは、或は、其の祖先の大天才に對する憧憬の美しき夢を冷却すること無き乎。

◉大師の如きは、其の出現に到るまでの血統的研究の周到ならん事を要す。これ感興ある好問題なり。譬へば不世出の園藝家が稀有の一大名花を產出せしめたるが如く、其の出現に到るまでの由來こそ、闡明するに値するものなれ。此の如き一大明花開いて後、種實の殘るもの無きをつねとす。

◉一地方の名士、一技一藝の名手と雖、其の血統を詮索するに多少の學術的感興を値せざるは無し。況んや聰明睿智、絕倫の大師の血統を闡明するの興味、奈何ばかりぞや。

◉誰か、此の如き大才の出現を豫言するを得たる者ぞ。大天才と大革命とは、豫言無くして出現す。既に、一たび其の出現するの後は、之に對する研究的興味も亦た之に伴なひて爆發す。今後と雖、大天才の出現を豫言するは難し。大

天才の出現は事實なり。ハレイ大慧星の出現は豫測されたるも、大師は、豫測されずして出現したるなり。

◉近ごろ大將乃木は死して神となれりと傳ふ。大師は佛となりたるべし。彼は即心成佛を提唱せり。神も佛も靈たるは一なり。神も佛も子孫無くして唯だ垂跡のみあるが可し。

其五

◉假令、森林に棲むと雖、森林のものを食ふに非れば、森林生活の徹底せるものに非ず。高野山には耕地無し。山中にて耕作を爲さゞるが大師の遺意なり。大師は、眞の森林生活を自ら營み、且つ人にも敎へたり。

◉近年、吾輩、高野山に登りて觀るに、半畝の菜園を營む者あるを見る。此の如きは啻に大師の遺言に背くのみに非ず。大師の遺意、新文明の今日に適合せず

と謂ふ莫れ。高野山中に、耕作を試むるは、誠に惜むべし。蛇足とは此の如き事をいふ。

◉吾輩、高野山に登觀するに、神氣爽亮、羽化登仙するの思無くんばあらず。森林は人心を醇化す。日本の森林の美なる高野山の如きは無し。高野山の森林は、新樹と紅葉との光彩の絢爛たる、大師の才華を憧憬する氣分に適はし。

◉吾輩、屢〻、仙境の畫圖を見るに、未だ容易に、適意のものを發見せず。仙境は則ち森林生活なり。高野山は、理想的の仙境ならずんばあらず。李太白が桃花流水杳然去、別有三天地非二人間一といへるもの、まさに高野山に合せり。

◉高野山の水、南北に流れ去る。山中、別に一乾坤を開く。則ち是、森林生活の別乾坤、狹きを覺えず。鶯語婉囀、夜は筧の音、心耳を澄ましむ。夏の曉、大師廟前、慈悲心鳥の鳴くを聞く。

◉吾輩、高野山に登りて、森林生活を想ふ。森林生活は、人をして理想に活きしむべし。大師は、此に一乾坤を開いて、修法の大道場と爲し、煙霞に活き、木實に活き、人をして、醇乎たる理想の乾坤に活きしめんとしたるべし。

◉森林生活は、人をして、自然に歸らしめ、人をして崇高ならしむ。人をして靈たらしむるの第一歩は則ち森林生活たらずんばあらざるなり。

◉吾輩、敢て、魚肉を好まざるには非ず。然れども思索に耽り、筆に、油の乘り來る時、神氣爽涼にして、軀幹、亦た醇化されたるを思ふ。此時、口に魚肉を思ふこと無し。思はざるのみに非ず。其の暈腥を嫌ひ、專ら菜果の清新なるに親まん事を欲す。此の境涯の時、生も無く、死も無し。

◉大師廟は、森林の殊に高雅なる處に在り。廟前、王川の水、清冷、玉を融かすが如し。大師の靈、長へに茲に安んずるなるべし。彼は生きて森林生活を營み、死して森林生活に甦へりつゝあるなるべし。

◉高野山にては、大師、永劫に死せず、金剛定に入つて、尙ほ生きつゝありと

傳ふ。大師は、眞に、生きつゝあるらし。此の感、高野山中の森林帶に於てするに非ずんば、安んぞ切實なるを得ん。

其六

◉國民性を象徴するに非ずんば、永遠の性命を有するを得ず。大師は、此の意味に於て、不朽の生命を有する者なり。彼の骨肉は朽つることあらんとも、彼の靈は、萬古に生くるならん。

◉大師が果して「いろは」假名の製作者なるやは問題なるべし。然れどもいろは歌を作り、假名を整理したる者は彼なるべし。

◉彼が高野山の結界文に、天神地祇を始め、歷代の皇帝、皇后の山陵、斯國の萬靈を祭るといへるは、彼の佛敎が國民化したる事を示す。兩部神道は、斯精神が敎義に現はれたるものなり。

◉彼が將來せる佛敎は、一瀉千里の勢を以て、日本化せられたり。例へば、明治維新の初年に於ける歐洲文明の急激なる輸入と同じく、其の日本化たるや、直譯的に馳せたるものありと雖、兎も角も、直譯的にもせよ。あれ丈けの速力と、あれ丈けの國民化の事業とを、短日月の間に成就したるは、驚嘆に値す。

◉彼が、京都に清瀧寺を創めたるは、長安の清龍寺を模倣したるものなるべし。模倣といふは、或は、酷評なるやも知れず。青龍寺を日本化したるは清瀧寺なり。此の事、直譯的國民化の一適例として見るべし。

◉流石に、大師の健惱を以てすと雖、寺名までも一々、扮本を離れて、新意匠を出すほどの餘裕は無かりしなるべし。然れども清瀧といへば日本的なり。それにて事足るべし。大師は、これ以上、此の事に、心を勞するの價値無しと思ひしなるべし。

◉斯身、再來の我無し。一抄、一瞬の時も再來せず。力を省き、勞を省き、時

を節して、以て大精神の樹立に貢獻せんとするが、大師の本意なるべし。

◉大師は、時を惜むの觀念の切なる、熟慮、冷靜、至れり、盡せり。彼は、政爭、教爭、すべて鬩爭の渦中に投ずるを爲さず、爭の外に超然たりしが彼なり。

◉彼は、其の性命の不朽なる可き所以の條件を、多く研究し、多く所有せり。彼が、國民性を理解し、自ら國民性を象徴せんとするの努力も亦た其の一たらずんばあらず。

◉健胃は、人間、理想的の一なり。健胃は消化、同化なり。大師は、其の精力の絶倫なりしに徴すれば、健胃なりしなるべし。彼は健胃にして健惱なり。彼の健惱は、大なる消化力を有し、海外の、有形的、無形的の文明を消化して、これを日本の國民性に、同化する事を敢て能くせり。

其七

◉大師の廟前に立ち、大師を思へば、語る可き事盡くる無し。感慨無量なり。吾が大師傳の一卷、すべて是れ、大師の靈に捧ぐるの文に非るは無し。

◉或は、吾輩に向つて、何故に、古來の英雄豪傑も、大師の靈前に俯首するを問ふ者あり。此事、吾輩、まさに大師の英靈に告げんとするところのものなり。

◉吾輩の所見を以てすれば、古來、千萬人、英雄豪傑と雖、大師の靈前に俯首するは、彼が、一生の大煩悶を解決せんとするの、崇嚴なる態度ならずんばあらざるべし。一生の大煩悶といふは、永遠の生命に關するの大煩悶なり。

◉不可抗力は「時」なり。「時」は、生を奪ひ、死を齎らす。何人と雖、迷無きは無し。悟れりといへども迷を離れず。其の生や、死や、不可抗力に引摺られ行くに過ぎず。

◉迷を離れ、悟を開き、安心立命を與ふる者は救世主なり。救世主は必ずしも大師のみにあらず。然れども大師の抱負は甚だ偉大なり。彼は、一大救世主を

以て自ら任ず。救世主たるは、世を救ふのみならず、併せて自ら救ふ所以ならずんばあらざるべし。

◉大師の説に、「佛は過去、未來を説けれども、現世を説かず。孔子は現世を説けども、過去未來を説かず。吾道は、過去、現在、未來を併せ説く」といへり。是則ち大師が自ら救世主たる所以の確信なり。

◉人生、必らず過去、現在、未來あり。此の三を併せ説かざれば、眞の救世主といふ可らず。此の意味に於て、大師は救世に關し、徹底せる觀念を有す。

其八

◉夫れ自ら現在を救ふ所以は、奮闘の外無し。奮闘は勇猛心の發揮なり。大師の一生は、敢て、理想的奮闘を能くせるものなるべし。然れども大師と雖、其の生死脱離の際に於ては、大煩悶無きを得ざるなり。

◉吾輩は、大師の入定に對し、其の大煩悶に、敬意を表す。彼は彌勒、現の際、再び斯世に出現せん事を言へり。二十六億斯年の後、斯身の再來を期するは、再來の我無きと孰れぞや。吾輩も亦た、二十六億斯年の後、斯世に再來せん事を希ふ。

◉彼は、大煩悶を抱いて、斯世の別離の岸に立てり、彼の入定は、衰死の病人が、病勢の昂進に任かすと同じからず。崇高なる態度を以て、正しく、一生一度の死に面せり。是れ吾輩の信ずる大往生なり。此の大往生の尊き事、筆舌に盡し難し。

◉何人も大往生を以て、終局の理想とせざる能はず。英雄豪傑が、大師の靈前に俯首するは、其の大往生に俯首するなり。

◉高野山に登れば、光景すべて大規模、以て、人の心目を爽快にするに足る。然れども是れ皆、大師と、世人との大往生を啓發する所以たるに過ず。大師一

人を以て見れば、彼の大往生を修飾するものは高野山なり。

◉大師の靈廟の前に立てば、慨然として大往生を憶ふ。吾輩、一たび高野山に登り、他年、老後の身を得ば、靜に、此に、閑棲せん事を思へり。吾輩、到處、墓田あり。斯生、蒼海の一粟のみ、一箇の因緣のみ。吾輩をして、高野山に憧憬せしむるものは、大師の英靈、金剛定の中より、吾輩を魅し、吾輩を導くに非ずや。大師を思ふかな。

佐渡の一日、稿半ばにして、越後、信州、東京を經て、海峽に南下し、五月雨の一夜、深更、澹雲微月の時、横枕の書齋に於て、殘燈に對して記す。睡魔、遠く去り、斯ぶ耿々として、獨り醒めつ

黒頭巾再記

大聖空海 終

大正七年十二月廿三日印刷
大正七年十二月廿五日發行

—(正價金壹圓五拾錢)—

著作者　横山健堂
發行者　東京市日本橋區檜物町廿六番地　江藤邦松
印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁
印刷所　東京市京橋區弓町二十五番地　三協印刷株式會社

納本
(大聖空海)

發行所　東京市日本橋區檜物町振替東京二三〇番　弘學館書店　電話本局四八二九番
關西發賣所　大阪東區淡路町五丁目振替大阪九九〇八番　金正堂書店

新刊

横山健堂先生著

縮刷 大西郷

上製 正價金壹圓貳拾錢
天金 送料金八錢

碧瑠璃園氏著

縮刷 鹽原多助

上製 正價金壹圓五拾錢
天金 送料金八錢

325
329

終